
3のジンクス

雪野 空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

3のジnkス

【Nコード】

N5558C

【作者名】

雪野 空

【あらすじ】

主人公、森千香子もりちかこが18歳の誕生日に付き合い始めた、半澤心吾はんざわしんごとの恋の話。千香子は初めて本気で人を好きになるが、付き合い始めて3年目でフラれてしまう。どうにかして諦めようとしたが、なかなか気持ちに整理が着かなく3年の月日が流れる。千香子を想う山下大樹やましただいきが、見るに見兼ねて告白するが…?!

第1話：願い

あれから3年が過ぎたね。

ねえ、心ちゃん。あたしは今でも心ちゃんが好きだよ。

今日11月5日はあたしにとって、凄く大切な記念日。きっとあたしの人生で、たった1度キリの運命の恋が実った日だから。でも、今日はその恋に終止符を打つために、思い出の場所に来た。3年前隣にいてくれた心ちゃんは、今日をどんな気持ちで過ごしてるのかな……。あたしは、今すごく悲しい。でも、涙はもう流さないんだ。だって、あたしの涙を拭ってくれる心ちゃんの手がここにはないから心ちゃんと付き合って1年目の記念日にここに来て、あたしは初めて綺麗な夜景を見たんだ。別に19歳になるまで夜景を見たことがなかったわけじゃない。ただ、夜景を綺麗だと思ったのはその時が初めてだったの。大好きな人と一緒に見る景色は綺麗に見えるし、一緒にすることは楽しく感じる。そういうことだよな？

あたしは、心ちゃんが最初で最後の恋だと思ってた。

もちろん心ちゃんに出会う前に、それなりに色んな人と付き合ってきた。

その時は本気で好きだとか言ってたけど、心ちゃんに出会ってどれも本気じゃなかったことに気付いたんだ。

心ちゃんと付き合って、初めて気付いた感情が沢山あったから。だから、あたしには心ちゃんが最後だったんだよ？『もしも別れたら……』なんて考えたことなかったの。3年も一緒にいたし、離れることはないだろうって安心が心のどっかにあった。でも、どんなに長く一緒にいたって離れることはあるんだよね。

今でもまだ夢を見るよ。心ちゃんがまたあたしの傍にいてくれる夢。別れたあの日からずっと、同じことだけ願い続けてた。

でも、もう3年が経っちゃったね。そろそろ潮時かなって思ってる。
気付くのが遅すぎるくらいだね。

あと5分で今日が終わっちゃう。このままもう止まってしまうばい
いのに…。

第2話：嫌な予感

「心ちゃん、お風呂入ったら？」ソファーに寝そべっている心ちゃんの体を揺すって、あたしは耳元でそう言った。

「ん…。」心ちゃんはゆつくりと起き上がり、近くにあったタオルを持って部屋を出る。あたしはその間に歯を磨くことにした。

心ちゃんと付き合って3年。

あたしが高3の秋に付き合い初めて、2年目で同棲。

あたしはもう心ちゃんと結婚するつもりでいる。

まあ、まだ21歳だし早いかもしれないけど。

心ちゃんはあたしの4つ上だし、そろそろだねって話もしてる。

正直に言っちゃえば、付き合い始めの頃の燃えるような感情はないかもしれない。

でも、あたしはたぶん心ちゃんにかなり依存してる。

心ちゃん無しでは生きていけない体に、知らないうちになっていたんだと思う。

長く一緒にいると、空気みたいな存在になるってよく言うけど、今のあたしにはそれがよくわかるんだ。

無くなったら死んでしまうから、絶対離れたくない。

あたしは心ちゃんに出会って、本気の恋を知ったんだ。

別に心ちゃんがあたしの理想そのものじゃない。

むしろ、理想から離れてる部分のほうが多い気もするし…。

だけど、やっぱり好きって理屈じゃないと思う。

いくら考えたって頭では理解できない。

でも、心ちゃんの指も髪も背中も全てが愛おしく思える。

それは今までのあたしにはなかった感情。

まあ、心ちゃんに会うまでは学生なりの恋をしてたのかな？今考えるとちょっと軽かったかも…。あたしは熱しやすく冷めやすいタイプだったから、いつも3ヶ月で別れてしまってた。中には3日っ

て人もいたけど…。これが、あたしと友達の間でよく話していた『3のジंकクス』。心ちゃんは初めて3ヶ月越えを達成できた相手なんだ。

今はまるで夫婦みたいだって周りから言われてる。なんだかくすぐったい気もするけど、まだまだ夫婦ってよりはカップルでいたいな。なんかカップルって言った方がラブラブっぽいから。

第一、最近心ちゃん好きって言うてくれないし…これって熟年夫婦化してない？ただ慣れちゃって言葉が必要なくなってきただけだね…。少し不安だな。でも、いつも心ちゃんは『ありえねえ。』ってあたしを馬鹿にするの。だから、信じてるよ。

あたしはソファアーの上の心ちゃんの携帯をちらりと見る。まだシャワーの音が聞こえるから、心ちゃんは上がってこないだろう。あたしはゆっくりと携帯に手を伸ばした。

「ちこー。シャンプー詰め換えんの忘れてたー。」突然心ちゃんが風呂場から叫んだので、思わず体がびくつとなる。

「今持つてくー。」あたしは何だか携帯に気を取られつつも、心ちゃんの元へシャンプーを届けに行った。絶妙のタイミングで心ちゃんから声をかけられたので、神様が見るなって言ってるように思えてやめた。

なんだか嫌な予感がした。

第3話：戦えない

あたしは今日久しぶりに心ちゃんの仕事場に遊びに来ていた。元々、ここでバイトしていたので、仕事場のみんなとは親しくしてる。心ちゃんとの出会いもここ。

「すず。久しぶりい。」

「あつ、ちかたん。久しぶりですー。」

すずは嬉しそうに笑ってあたしに抱き着いた。この男だらけの仕事場で、唯一女の子のバイトがすず。すずはあたしの3つ下で、凄くあたしになついてくれる。ちよつとボケてるけど、明るくて素直な子だ。あたしはすずが大好き。心ちゃんに会うためでもあるけど、ここに来るときは必ずすずに会いたくなつた時。

「ん、髪切った？」

「そうなんですよー。」

「可愛くなったね。彼氏喜んだじゃない？」

あたしのそんな問いかけに、すずはなんだか悲しそうな顔をした。

「実は結構前にフラれたんです。」

「えっ?!」

あたしは大声を出して驚いた。リアルにびっくりしたから。だって、あんなにラブラブだったのに、めちゃくちゃ自慢してたのに…。

「大丈夫？なんですぐに相談してくれなかったのー？」あたしはすずの頭を撫でながら、そう言った。すずのことだから、相当泣いたに違いない。

「もう、大丈夫ですよあ。」すずは笑顔を見せてくれたけど、まだ少し悲しそうだった。次に付き合う人は、すずを大事にしてくれる人だといいなあ。

ふとあたしは壁に張られたメモ用紙を見つけた。

バイトの子の名前と携帯番号が書かれた紙。

そつえば最近バイトが増えて、連絡先がよくわからないって心ち

やん言つてたなあ。

名前を読んでいくと、下から2番目にすずの名前が書いていた。
でも、すずだけは特別。

名前の前にアホって書いてある。これって心ちゃんの字だよね…？
その時あたしにはわかったんだ。心ちゃんが、すずのことを特別扱
いしてるって。ハートを語尾に付けるより、そうやって馬鹿にする
方がずっとわかりやすい愛情表現なの。だってあたしがバイトだっ
たときも、心ちゃんはそうやって馬鹿にしていたから。

やだよ、心ちゃん。お願いだから、すずだけはやめて…。すずとは
戦えない。

第4話：奪わないで

予感がだんだん確信に変わってくると、人間ってのは逃げなくなるもので…あたしは毎日自分の考えを否定していた。心ちゃんの携帯も怖くて触れなかった。あれから3ヶ月近く仕事場に行っていない。何より怖かったのが、すぐからのメールがまったくと言っていいほど来なくなったこと。さすがあたしに後ろめたいことがあるから、メール出来ないんだとしか思えなかった。何でよりによってすずなんだろ…。心ちゃんの気持ちがあたしから離れることはわかってる。でも、それを言葉にしまったら、きっと心ちゃんはおたしから離れる道を選ぶ。だからあたしは知らないふりをする。それが悲しいことだっってちゃんとわかってる。でも、心ちゃんと離れるよりはマシなの。例えそこに愛がなくても…。

「お帰りー。」あたしはいつも通り玄関まで来て心ちゃんに抱き着いた。同棲し始めた頃、心ちゃんの帰りが待ち遠しくて…帰って来たときはこうやって愛情表現した。あれからずっとあたしの気持ちは変わってないって、毎日心ちゃんにアピールしてるんだよ？

「今日も疲れたー。早くちこのご飯食いてえ。」心ちゃんはあたしの頭を撫でて、部屋に行った。抱き着いていたあたしの腕がほどける。

『心ちゃん、約束忘れたの？』あたしは心の中でそう言った。同棲を始める時、あたし達は決まり事を作った。おはよう、おやすみ、いつてきます、ただいまのときは必ずキスするって。喧嘩してたとしても、絶対するって…。だから、あたし達はすぐに仲直りしたんだ。このキスには大きな力があるんだよ？

「今日は麻婆春雨ー。」

だけど、あたしはあえて何も言わずに、笑顔で言った。

「おっ、いいねえ。」

心ちゃんもいつも通りに笑う。

これでいい。今はこれ以上望まないから。だから…だから、心ちや
んをあたしから奪わないで…。

「…ねえ、心ちゃん。好きだよ。」

第5話：決断のとき

ここ最近、心ちゃんの帰りが遅くなった。1時間とか2時間じゃない、ほんの10分程度。だからあたしは何も聞けない。ちよつと仕事に忙しかつたのかな、とか自分に言い聞かせるしかないんだ。でも、きつとそろそろごまかしがなくなる頃。だって、あんまりキスしてくれなくなったもん。多分それはあたしに対する愛情がなくなったからじゃない。後ろめたいと思う気持ちが愛情に勝っちゃったから。きつと愛情は0%になったわけじゃなくて、ただあたしに対する愛情より、すずに対する愛情の方が上になったんだろう。心ちゃんから別れを告げられたら、あたしはどうするか。きつとその時にならないとわからない。今は考えただけで息苦しくなるけど、心ちゃんの口から別れの言葉を聞いたら頭が真っ白になると思うから。

あたしは今までに撮ったプリクラを眺めた。馬鹿みたいにふざける2人がそこにいる。今はこんな風に笑えないね。お互い心に迷いがあるから。

涙は自然と出た。プリクラ1枚1枚にちゃんと思い出があつて…3年前のプリクラだって見るだけで会話が思い出せちゃう。記念日は必ず休みを取って出かけたね。その日は毎回夜景を見に行った。来年も再来年もずっとずっと一緒に過ごすはずだったのに…。心ちゃんの嘘つき…。

はつと気付いて時計に目をやると、もう夜の11時を回っていた。今日はいつもより30分も遅い。覚悟を決めろってこと？今日言うつもりでいるの？やだよ、あたしまだ心の準備が出来てない。きつとそんなのいつになっても出来ないだろうけど…。

ガチャ、とドアの開く音が聞こえた。

決断のときが来たんだ。

第6話：星一つない空

「おかえり。」あたしは玄関まで出迎えに行かなかった。テレビの液晶をただぼんやりと眺めたまま。心ちゃんが荷物を置いた音がした。

「ただいま。」そう言ってあたしの横に座る。

「遅くなってごめんな。腹減ったべ？」優しく、まるで小さい子に話し掛けてみたい心ちゃんの声。こうやって最後の時を静かに迎えるんだ…。

「話し、あるんじゃないの？」焦らされれば焦らされるほど辛かった。今は早く心ちゃんの気持ちを聞きたい。

「…ごめん。ちこのことを嫌いになったわけじゃないんだけど…。」そんなのわかってる。心ちゃんはあたしを嫌いにならない。今まで過ごして来た時間でわかるもん。

「ちこも気付いてると思うけど、ずすのこと気になって…」あたしはずっと黙っていた。頭がぼーっとして何も考えられなかったから。

「あいつ彼氏にフラれてから、こつちが見てんの辛くなる感じで…最初は相談にのってただけだったんだけど、段々ほっとけなくなっ…もう、ちこのことだけ考えてやれないんだ…。」心ちゃんは苦しそうに、辛そうにあたしに言った。でも、あたしにはその声がうつとうしかった。あたしの大好きな心ちゃんの声でそんなこと言わないで。あたしの目の前にいる人は誰？

「庇うみたいで変だけど、ずすはずっとちこのこと気にしてた。悪いのは俺だから。」当たり前じゃん。裏切ったのはずすじゃなくて心ちゃん。そんなのわかってる。でもね、あんなに好きだったずすでさえ、今は好きだと思えない。ずすが現れなかったら…なんて考えてる。人間って醜い。

「ちこ、本当にごめん。」心ちゃんの瞳にうつすらと涙が浮かんだ。あたしも泣いた。

「…嘘つき。」

「ごめん。」

「ごめんじゃないよ！結婚するって言ったじゃん！あたしは…心ちゃんとの未来しか考えてなかった…いなくなったら、何も無いじゃん…！」思いつきり心ちゃんの胸に頭をぶつけ、あたしはそのまま大声で泣いた。心ちゃんが頭を撫でてくれないから、涙は全然止まらなくて…。

「殴ってもいいよ。何してもいい。ちこの望むとおりにするから。」何それ。殴ったって何も変わらない。望むとおりにしてくれるなら、あたしの傍を離れないでよ…。

「ずっと付き合うの…？」

「そついう話はしてない。ただ、ちこと付き合ってるのに、ずずのことばかりってなるのは駄目だと思つて…」

「あたしとは別れるんだ…？」

あたしの問いに心ちゃんはくつと首を動かした。別れるんだ…別れる？別れられる？無理だよ…心ちゃんがいらない人生なんて何の意味もない。

「どうしてあたしじゃ駄目なの…？」

「ちこが駄目なわけじゃない。俺が…」心ちゃんはあたしから目を反らし俯いた。その瞬間涙が一粒落ちたのが見えた。

泣かないでよ、心ちゃん。それはずるいよ。

「…無理だよ！」あたしはそう叫んで家を出た。当然、心ちゃんは追つてこない。

あたしは物分かりのいい女じゃないから、そんなにあっさり別れを認められない。でも、心ちゃんを本当に好きなら、心ちゃんの気持ちをもちと考えるべきだ。

あたしはふらふらとあてもなく歩き、ふと目に入つた公園のブランコに座つた。さすがにこの時間は誰もいない。あたしはゆつくりとブランコをこぎ始めて、空を見上げた。星は1つも無い。

「そつか…今日曇りだったから…」

いつもは綺麗だと思った夜空は、今日は一際真っ暗で、小さなあたしに襲い掛かって来た。
助けて…心ちゃん。

第7話：帰ろう

朝日が昇って来た。一体、何時間ここに居たんだろう。新聞配達のパイクの音が、遠くから聞こえてくる。

意外と冷静になれるもんだな、とつくづく感じた。あんなに取り乱して泣いて、叫んで、家を出たのに、ただぼーっと座ってるだけで落ち着いてくる。

どんなに時間が過ぎても、心ちゃんと別れるという現実は変わらない。あたしがそれを認めようが認めまいが、心ちゃんの気持ちはもう決まってるんだ。あたしが無理に心ちゃんの傍にすることを望んでも、もう2度と幸せだと思える日は来ないだろう。心ちゃんの気持ちはあたしにないのだから…。

わかってるんだ、ちゃんと。ただ少しだけ困らせてみたかっただけ。あたしを裏切る心ちゃんを、困らせたかった。それだけだよ。

心ちゃんが辛いのはあたしが1番わかってる。だってあたしが心ちゃんの1番近くにいたから。心ちゃんを愛してるから。心ちゃんが見せた涙も嘘じゃない。全部わかってるよ。

早く帰ってあげなきゃ。きつと心配してる。心ちゃんは寝ないであたしの帰りを待ってる。あたしと同じように苦しみながら。帰ったら、わかったよって優しく言ってあげよう。笑って心ちゃんを見つめよう。最後が涙なんてやっぱり悲しすぎるもんね。

心ちゃんのいない人生なんてつまらないから、少しでも思い出と一緒に過ごそうかな。そうすれば、悲しくないと思うんだ。少しだけでも。きつと心ちゃんはあたしの最後のわがままを受け入れてくれる。それくらいいいよね？罰当たらないでしょ？ねえ…神様。

あたしはブランコから降りて、お尻に着いた汚れを払った。気付いてみれば、髪の毛はぼさぼさだし、すっぴんのジャージ姿。自分の情けない姿に思わず少し笑ってしまった。

大丈夫。笑える。あたしは強くないけど、弱くもない。しばらくク

ヨクヨしたって、何年かすればいい思い出になるよね。今はただそう信じて、心ちゃんのもとに帰るとするよ。
今はまだ大好きな心ちゃんのもとに…。

第8話：おやすみ

「…ただいま。」慌てて玄関まで走って来た心ちゃんに、あたしは笑ってそう言った。

「お、おかえり。」心ちゃんは拳動不審になりながら、言葉を返した。

…やっぱり寝てなかったんだね。

「心ちゃん、仕事でしょ？少し寝たら？」

「いや…大丈夫。」

「そう？じゃあ、朝ごはん作るね。」あまりにもいつも通りなあたしの態度に、心ちゃんは困惑気味だ。何度も口を開きかけて、また閉じる。その繰り返し。もうあたしを悲しませたくないんだよね？だから怖くて何も言えない。それは十分あたしへの思いやりだっと思うよ。だから、許してあげる。

「…条件が、ある。」

心ちゃんがキョトンとした顔であたしを見る。

「こここの物を実家に持って帰るんでしょ？2人で買ったものも半分しなくちゃいけないし。今日でさよならってわけにはいかないじゃない？だったら…だったら、あと何日かの間今まで通りに過ごそ？心ちゃん、あたしのこと嫌いになったわけじゃないんでしょ？最後は笑ってバイバイしたいから…だから最後は今までの2人で過ごしてそれが、別れる条件。」あたしは真っすぐに心ちゃんを見た。心ちゃんは最初驚いていたみたいだけど、少し考えるように俯いた。

「反論は無しだよ。…いいでしょ？これが、あたしの精一杯だよ…。」そう言っただけであたしは泣き崩れた。もう泣かないつもりでいたのにな。もう平気だと思ったのにな。やっぱりまだ苦しいよ。悲しいよ、心ちゃん。

「わかった。」心ちゃんはあたしと同じようにしゃがんで、あたしの涙を拭いた。その指が、瞳が『ごめんな』って言ってる。別れる

って、そう決めたって…こんなにも心ちゃんの全てが愛おしいよ。
「ぎゅう、して…」あたしがそう言くと、心ちゃんは力強くあたし
を抱きしめた。あたしも心ちゃんの背中に腕を伸ばし、しがみつく
ようにして泣いた。

心ちゃんの匂い落ち着くなあ。

あたしの髪を優しく撫でるその手も。

心ちゃんはわかってるもんね。あたしが泣いたときはこうすればす
ぐに泣き止むんだって。喧嘩したっていつも心ちゃんは相手にし
てくれなかったよね。あたしが馬鹿みたいに泣いて怒って…心ちゃ
んはその度にこうやって慰めるの。それであたしは眠っちゃうんだ。
まるで幼い子供が泣き付かれて眠るみたいに。

おやすみ、心ちゃん。あたしは深い眠りについた。

第9話：麻婆春雨

心ちゃんは、本当に今まで通りに接してくれた。あたしを馬鹿にして、甘やかして、キスをして……。あたしも泣いたりしなかった。だって幸せだったから。でも、とうとう今日が最後の夜になってしまった……。

毎日少しずつ家の物がなくなり、それが同時に思い出も消えていくように感じて悲しかった。

2人で買ったものは全てあたしが貰うことになった。よく考えれば当たり前だよ。

新しい恋に進もうとしてる人間が、過去の思い出を持っていくわけがない。……馬鹿だな。だってそれが少し悲しいんだもん。このソファーを見たとき、レンジを見たとき……あたしを思い出してほしかった。心ちゃんにあたしという彼女がいたことを、あたしという人間を愛したことを一生忘れてほしくない。これはわがままなんだろうか……。

アパートを出ていくのはあたしが後なので、手続きはやっておくし心ちゃんに伝えた。

でも、あたしはしばらくここにしようと思う。

荷物だって沢山あるし、実家に帰るのは少し情けない気がしたから……なんて、本当の理由ではないけど。きつとあたしは友達に、家族に見栄を張ってそう言うだろう。でも、本当は……心ちゃんがいつでも帰って来れるように、ここで待っていたいから。こんな女うざいんだろうね。わかってるから、口に出して言ったりしない。最後の悪あがきかもしれないね。往生際が悪い女。

さて、今日のご飯は何にしようかな。最後だから贅沢に？……ううん。いつも通りの2人で迎えたいから、大好きな麻婆春雨にしよう。心ちゃんの大好きな、麻婆春雨に。

第10話：最後の夜

「…今日ね、新しい化粧品買ったんだ。」

「ふーん。」

「ついでにお菓子も買ってきた。全部食っちゃったけどね。」

「うわ、最低。」

あたしは心ちゃんの腕にしがみつき、クスクスと笑った。

布団に入ってくだらない話を始めてから、もう1時間近く経つかな…。こうやって話しをするのは久しぶり。でも、そろそろ寝なくちゃ。心ちゃんきつと眠いはずだね。だけど、これが2人で過ごす最後の夜だから、あたしが泣き出さないように話をしてくれてる。

…大丈夫なのになあ。だって、もう心ちゃんの前では泣かないって決めたもん。

「…エッチしょ？」

ふっと口から零れたあたしの気持ちだった。これが最後の夜なら、心ちゃんに愛されていたことを身体に刻み付けなきゃ…。そう思ったから。でも、心ちゃんは何にも言わない。ただ石みたいに固まっている。

「駄目だよー。心ちゃんなら喜んで飛び付いてこなくちゃ。」あたしはわざと冗談っぽくそう言った。今日のは今までのとは違う。それを心ちゃんは感じてると思う。でも、そんな風に重たく捉えてほしくなかった。ただ今までみたいにあたしを愛してほしかった…。それだけなの。

心ちゃんはあたしに優しくキスをした。泣きそうに震える唇に。涙が溢れそうな瞳に。何回も小さくキスをした。それが『ごめんな。ゴメンな。』って何回も言ってるように思えて、凄く切なかった。あたしは心ちゃんの首に腕を回し、ぎゅっとしがみついた。泣かないように、悲しくならないように、ただ心ちゃんに愛されてることだけを感じた。ただ心ちゃんの温もりだけを感じた。

心ちゃん。心ちゃん…。あたしの中はこんなにも心ちゃんです。いつばいだよ。あたしを愛してくれてありがとう。いつも傍にいてくれてありがとう。叱ってくれてありがとう。あたしはそんな想いを込めながら心ちゃんの身体にキスをした。首筋に愛し合った跡を残したかったけど、さすがにそんなこと出来なかった。そのかわり心ちゃんの背中に、小さな傷を付けた。小指で少しだけ引つかいて…。最後の嫌がらせ。こんなものなんでも言い訳が出来るでしょ？でも心ちゃんにはわかってるの。あたしと最後に愛し合ったときの傷痕だって。…だからせめて、この傷痕が消えるまで心ちゃんの中に、あたしという存在があるといいな。いつそのこともっと深い傷を付ければよかったかな。…なんてくだらない女。あたしってこういう人間なんだ。

寂しくて寝付けないと思ったあたしは、心ちゃんと手を繋いで眠った。やっぱり心ちゃんの手は、あたしを安らかな気持ちにしてくれる。最後の心ちゃんの寝顔をしばらく見つめてから、あたしは目を閉じた。

涙は一筋だけ流れた。

第11話：サヨナラの代わりに

青いカーテンが塞ぎ切れなかった朝日が眩しくて、あたしは目を覚ました。目覚ましのなる10分前。今日はこのまま起きてしまおう。悲しくて眠れないと思ってたのに、あたしは深い深い眠りの中にいたと思う。

夢を見ない日は久しぶりだった。…心ちゃんの左手のおかげだね。もう、この手はほどけてしまったけど…。心ちゃんはあたしに背を向けて眠っていた。左を向いて眠るのが心ちゃんの癖だったから、こんなのなんでもないんだけど…目覚めたときに背を向けられてるのは、やっぱり少し悲しい。遠く感じちゃうよ。

あたしは心ちゃんを起こさないように、そっと布団を出た。もしかしたら、心ちゃんも起きていたかもしれないけど。

あたしは変なことを考えないように、心ちゃんの寝顔を見ないまま風呂場に向かった。まだ少し眠っている身体をシャワーで洗い流すように、気持ちもすすきり洗い流せたらいいのにな。

でも、何でだろう？最後が近付けば近付く程、悲しさが減っていく気がする。

…この場になってもまだ信じ切れてないのかな。心ちゃんはもうあたしの傍から離れていくのに…。都合のいいときに現実逃避。でも、その方がいいかも。心ちゃんのことばかり考えてたら、泣いてばかりで仕事にならないだろうし。せめて今日は…全てを受け止めてなくても許してもらえないかな。

ね、神様？

いつも通りに支度を済ませ、いつも通りの時間に玄関に立った。どうせ今から10時間後には、また同じ場所に帰って来るんだ。悲しくなんかない。

靴を履きながら、あたしは何度も寝室に目をやった。

ドアは閉まったままで、心ちゃんは出てこない。

いびきをかいていないから、きっと狸寝入りなんだろうな。

…やっぱり最後に心ちゃんの顔を見ておこうかな。いろんなことを考えて、一度履いた靴を脱ぎかけたときだった。寝癖のついた頭を搔きながら、心ちゃんが寝室からゆっくりと出て来た。何て言えばいいかわからなくて、あたしはただ玄関に突っ立っていた。心ちゃんはおあたしの傍まで来ると、寝起きの掠れた声で

「いつてらっしゃい。」と言った。その言葉に『サヨナラ』の意味も込められていること、ちゃんとわかっていた。だからあたしもちゃんと言ったの。

「いつてきます。」って。

…ちゃんと笑えたよね？大丈夫だよな？心配しないでね。
幸せになっただけ…。

ドアは静かに閉まった。

第12話：遠いどっか

休日だったせいか、職場が忙しかったのは好都合だった。何も考えずに働くのが、たぶん今は1番楽。それが逃げてることだとわかつてるし、現実を見なきゃとも思う。もう少し学生の頃にも失恋しておくべきだったかな。そうすればこういうときどうすればいいのかわかったのかもしれない。とりあえず明日は仕事が休みだし、ゆっくり眠ろう。

鞆から鍵を取り出し、穴に差し込んだ。

ガチャ、という音がいつもより大袈裟に聞こえた。自然と深呼吸している自分がいる。…だって開けたらもうそこには心ちゃんはいないんだもんね。ゴクリと一つ唾を飲んで、ドアを開けた。ぱつと見るだけでは何も変わらないうつもの家。だけど、あたしにはわかる。沢山の2人の思い出が無くなってること。

ああ、本当にもう心ちゃんはいないんだ…。帰って来たら心ちゃんが出迎えてくれるかも！とか馬鹿みたいに考えてた自分が情けないやっぱりちこが好きだ！とかつてさ。言ってくれる訳無いか。超妄想癖。笑える。

「…ただいま。」 呟いただけなのに、あたしの声はよく響いた。誰も返事してくれないんだね。わかつてるんだけどね。

「…ただいま！」 ねえ、心ちゃん帰って来たよ？お帰りつて出迎えに来てよ。そしてキスしてよ。だってそれが2人で決めた約束じゃん。

「ただい、ま…」

お帰りつて言つてよ！心ちゃん…。あたしは力無くその場に座り込んだ。心ちゃんがいてくれないと、あたしの存在する意味がないんだよ。あたしの手は心ちゃんにしがみついたためにあつたし、瞳は心ちゃんの写真や寝顔を見るためにあつた。あたしは心ちゃんがいなきゃ生きていけないんだよ…。

泣いても泣いても涙は止まらなくて…玄関が湖になつてしまつたのではないかと思うくらい泣いた。こんなに泣いてばかりいたら、干からびて死んじゃうかもね。

心ちゃん。本当にもう会えないの？気が変わったって戻って来てくれないの？勝手だつて怒ると思うけど、許してあげるよ？だつてあたしで駄目な理由なんてないじゃん。お互いB型同士で、わがまま好き勝手やるくせに、こんなにお互い好きでいれるのは凄いつて言つてたじゃん。あたしだつてそう思うよ。心ちゃんの嫌なところいっぱいあつたし、何回も怒つた。でも、それよりも好きだつて思う気持ちが大きかつたの。それは心ちゃんも同じだつたはずだよ。きつとうまくいくのなんて最初だけ。後から嫌なところが見えて来て、別れちゃうのがオチなんだから。あたしたちの過ごした3年は長いんだよ？濃いんだよ？他の誰にも負ける訳無い。

だから失敗して戻つてくればいい。どんな言い訳だつて認めてあげるから、あたしのとこに戻つてくればいい。

さすが心ちゃんの全部を理解しなければいいのに。…あたしって最低な女。どうして愛してる人の幸せを壊そうとするんだろう。性格歪んでるのかな。実はめっちゃ腹黒い奴だつたの？

でも、やっぱりあたしじゃなきゃ駄目だよ。心ちゃんを幸せにするのは、あたしだけでいいもん。他の誰もいらさないよ。

もうみんないなくなればいい。心ちゃんとあたしだけの世界なら、心ちゃんはあたしを愛してくれるでしょ？

…なんだかこんなことばっかり考えて、あたしの『愛』つて全然綺麗じゃないね。だから心ちゃんは離れていったのかな…。

遠い遠いどこかに。

第13話：煙草

玄関でぐずぐず泣いていたはずのあたしは、しつかりと布団に移動して寝ていた。気がつけばもう昼近くだ。

布団を残してもらったのはすごくありがたかった。心ちゃんの匂いがするから、まるで心ちゃんに抱かれているような気がしてよく眠れる。匂いなんて何日かすれば消えてしまっただろうけど。

心ちゃんとよく聞いた歌を流して、あたしは2人掛けのソファの右側に座った。もう左に座ってくれる人はいないのにね。ソファの横には2人で苦勞して取った、ぶたのぬいぐるみが置いてある。あの時2人とも意地になって、UFOキャッチャーにとんでもなくお金を使ったね。あれはまだ付き合って1年の頃かな。あたしはぬいぐるみを膝の上に乗せ、じつと睨み合った。

「お前は可愛いね。」ぶたの鼻を人差し指で押しながら、あたしはそう言った。独り言だなんてちよつときてるよね。うなだれてため息を着いたあたしは、テーブルの下に潜んでいた灰皿に気がついた。心ちゃんが使っていた、青い灰皿。そつと手を伸ばしてテーブルの上に置く。心ちゃんが忘れて行った、心ちゃんの愛用品。まだ長いのに消されてる煙草もある。…心ちゃんもあたしのことを考えて、苦しくて、こんなに沢山煙草を吸ったのかな。心ちゃんだって悩んだよね。辛かったよね。そう、信じていいよね？

あたしは化粧ポーチの中から、ずつと入れっぱなしにしていたライターを取り出した。初めてラブホに行ったとき部屋にこれが置いてあって、思い出につてあたしがもらったんだよね。心ちゃんが煙草を吸う女嫌いだって言ってたし、あたしはライター使うタイミンダなんてなかったんだけど。

あたしは心ちゃんの吸いかけの煙草を手にとった。心ちゃんが傍にいた頃はごみにしか思ってたのに…心ちゃんがいなくなっただけで、こんなもまでが愛おしく宝物のように思えてしまう。煙草

をくわえ、思い出のライターで火を付けた。煙草の吸い方なんてわからないけど、無償に吸いたくなつたの。心ちゃんが吸つたこの煙草を。

「っこほ。…まず。」

少しむせて、すぐに口元から煙草を離した。灰皿に煙草の灰を落とす。段々その指が心ちゃんのものに見えてきた。太さも色も全然違うのにね。あたしの頭の中が心ちゃんदैいっばいになってるせいだね。

あたしの手元からただ真つすぐ上に煙が流れる。それをぼーっと眺めてただけなのに、涙が溢れてきた。

心ちゃんの匂いが体中を包んでくれる。でも、足りないよ。心ちゃんに触れないもん。心ちゃんの声が聞けないもん。

その煙草が短くなるまで、あたしはむせながらも吸い続けた。煙草を持つ自分の手を心ちゃんの手を重ねて。煙の向こうに心ちゃんを想像して。ただひたすら泣きながら煙草を吸つた。

短くなつた煙草は灰皿の上でしばらく飾られた。ハイライトメンソールの煙草の匂いが部屋中に充満していた。

いつも聞いていた2人の思い出の曲は、よく聞けば別れの歌に聞こえた。

第14話：メール

あたしは今まで生きてきた中で、死にたいと思ったことは1度もなかった。

それはあたしの性格の象徴でもあったし、生きていればいつかいいことはあるって信じてるから。

でも、その生きてる時間が苦痛なんだよね。

だから逃げたくなる。

よく、フラれて自殺する人がいるけど、今はよくその気持ちがわかるや…。まあ、あたしは一生自殺なんてできないと思うけど…。だって、あたしが死んだら心ちゃんが後ろめたい気持ちで、辛い人生を送ることになるから。心ちゃんには幸せになつてほしいから、あたしは我慢する。心ちゃんが傍にいないくて苦しくても、我慢する。それがあたしの愛だ。

どうしてこんなに好きなのにつて、考えれば考えるほど自分が醜い人間になってしまいそうで嫌だった。

まるでストーカーみたいな自分。

心ちゃんとの思い出をまだ何一つ消せていない。

心ちゃんから貰った指輪も、2人で撮ったプリクラも、心ちゃんから送られてきたメールも、全て消せないまま。

友達に散々説教してきたくせに、実際自分がフラれればこうだ。そんなに簡単に思い出を消せるわけがないんだよね。それどころか、あたしなんて吸わない煙草を買つてはお香みたいに煙を出して、心ちゃんが付けていた男ものの香水を買つて…本当くだらない。その匂いがないと生きていけないなんて、あたしはちっちゃな人間だ。

心ちゃんと別れてから2週間が経ち、ようやく現実を見始めた自分。まず、今のバイト先を辞めることにした。ここの家賃を払っていくには、もう少しお金が必要だったから。居酒屋でバイトしようかなと思ってる。本当はキャバクラとかでもいいんだけど、心ちゃんが

嫌がってたのを思い出して辞めた。別にもう心ちゃんの彼女ではないから、関係ないんだけど。

そして今日、4ヶ月ぶりにすずからメールが来た。すずの名前を見ただけで、胸が痛くなった。直りかけの傷に塩水でもかけられた気分。恐る恐る開いたメールの文章は簡単だった。

『会って話したいことがあります。』

あたしは痛む胸を押さえ、携帯を閉じた。

第15話：好きだから

地元の駅の近くですずと待ち合わせた。それはすずを許すためじゃなくて、嫌味の一つでも言ってやろうと思ったから。シカトしようと思っていたメールに返事を送り、それから1週間後の今日、会うことになったのだ。

あたしは車を持ってないから、電車でここまで来た。ガタンゴトンと揺られながら、沢山の嫌味を考えて。

「…久しぶりです。」

待ち合わせ場所に先に来ていたのはすずで、あたしを見つめるなりそう言って深々と頭を下げた。こんな他人行儀なすずを見たのは初めてだ。いつも馬鹿ばかり言って、天然系の女だったのに…これは2人の関係に大きなひびが入った証拠だ。

あたしは黙ってすずに近寄り、すずが頭を上げるのを待った。すずが泣きそうに震えていることには気付いたけど、あえてなにも言わなかった。だって、泣きたいのはあたしの方だから。

「…いい加減、止めてよ！話したいことあるんじゃないの？」

痺れを切らしたあたしは、そう言って近くのベンチに座った。その時自分の薬指の指輪が目に入った。…そういえば、いやがらせのつもりで、心ちゃんから貰った指輪を付けてきたんだっけ。あたしは自然とその手を後ろに隠した。こんなことをやってる自分が惨めに感じたから。決して、すずが可哀相だと思ったからじゃない。

「…ごめんなさい。」

ようやく発したすずの言葉にあたしは怒りが沸いて来た。あたしは謝ってほしいわけじゃない。…じゃあ、どうしてほしいの？そう聞かれると、答えられないけど。

「なんで謝んの？だったら返してよ！」

そんなこと言っただって無意味なことはわかってる。心ちゃんは物じやない。あたしたちがいくら言い合っただって意味の無いこと。でも、

言わずにはいられなかった。そんな弱々しい思いなら、心ちゃんをあたしに返してほしいと、素直に思ってしまったから。

「…ごめんなさい。それは出来ない。」

「…なんで？心ちゃんのこと本当に好きなの？フラれて悲しいから、心ちゃんの優しさを利用してただけでしょ。」

酷いことを言っているとわかっていたけど、止められなかった。だってこの怒りや悲しみをぶつけなきゃ、あたしはずっと一人で苦しむだけでしょ？…でも、言いたいことを言えば言うほど胸が痛む。なんで？…なんですつきりしないの？

「あたし本気で好きです。ちかたんの彼氏じゃなければって何度も思った。諦めようとも思った。でも、あたしには必要な人だから…」
そう力いっぱい言ったすずの瞳には、今にも溢れ出しそうな涙があった。思わずあたしは視線を外した。苦しくて苦しくて息をするのが精一杯。

…わかってる。すずが心ちゃんを本当に好きだってことくらい。そして、それと同じくらいあたしを好きだってこと。だから、すずも悩んだんでしょ？そんなの痩せ細った身体を見ればわかる。…わかってるよ。わかってるけど…なんで心ちゃんなの？なんですすまであたしの必要な人を必要とするの？心ちゃんじゃなかったら、死ぬほど全力で応援するから…心ちゃんは譲ってよ…。

「あたしだって、心ちゃんが必要なの。…なんかの間違いだって言ってよ。すずとは戦いたくなかった…。」

…だって負けるってわかってたから。すずの泣き顔を見たら、あたしはきつと勝てないとわかっていたから。だって、あたしはすずのこと大好きなの。

「…もう、昔みたいに仲良くは出来ない。正直、すずの顔を見たくない。…悲しくなるから。だから、遠くで応援してる。幸せになつて。…あと、心ちゃんを幸せにして。」

そう言って、あたしは大きく息を吐いた。…あれ？すつきりした。気持ちが晴れてきた。…悲しさはちつとも減らないけど。

ああ、あたしこれが言いたかったんだ。悲しいけど、辛いけど、大好きな2人だから応援するよって…そう、言いたかったんだ。

「あと、これ…」

あたしは薬指から指輪を外し、すずに渡した。

「嫌がらせのつもりだったんだけど…心ちゃんに返してて。てか、すずがどっかに捨てちゃってもいいし。」

すずは指輪を受け取ったものの、辛そうにそれを見つめた。

「でも、これは…」

「持つてるだけ辛くなるし、返しそびれただけだから。もう、いらない。」

あたしは俯いて首を横に振った。ぎりぎりのところで涙を堪えている自分に、気付いてほしくなかったから。あたしは平気だって見せ付けないとね。だから、今は絶対泣かない。

「じゃあね。」

最後はしっかりとすずの顔を見た。もう、ボロボロに泣き出していたすずは、何も言わずにあたしを見送った。きつと、あたしを思っ
て泣いたんだろう。だから、その涙に免じて…いつか笑って会えるように頑張るよ。

何も付けてない薬指はやけにスースーする。

帰りの電車の中で、離れていく地元を見ながらそっと泣いた。

「…ばいばい。」

第16話：あわよくば

会おうとすれば会える距離にいる。心ちゃんが携帯を変えていなければ、連絡だつて取れる。そういう状況は余計辛かった。煙草をやめたくてもやめれない人は、ぐだぐだこうやって悩むんだろう。手の届く距離にいるのに触れちゃいけないなんて、地獄だね。

何度も電車に乗りかけたし、何度もメールを送りかけた。もしかしたらっているんな期待をして。

でも、あの日ずっと会ったときに、もう決心したことだから。応援するって口にしてしまったら、もうあたしが心ちゃんを好きでいてはいけないということ。あたしは第三者なんだから。

心ちゃんとの思い出が詰まった部屋は、居心地がいいようでとても苦しかった。だけど、あたしはここから離れられない。麻薬中毒の様。

誰か助けてって何度も叫んだけど、そんなの無意味で…だつてこの痛みや苦しみは心ちゃんじゃなきゃ取り除けないものだから。あたしには泣くことしか出来なかった。悲しい気持ちを形にして身体の外に出すことは、少しでも効果があつた。まだまだ心ちゃんを思う気持ちは消えそうにないけど、少しずつ悲しみが和らいでいけばいいな。

今日は居酒屋で初のバイトの日だった。店長さんが優しいから、安心して仕事が出来るけど、周りの人と仲良く出来るかは心配だった。女の人はみんなギャルっぽいし…あたしみたいなのしよばいって馬鹿にされてそう。まあ、見た目で判断するのはよくないよね。

それに夜に働くのはあたしにとって、都合のいいことだったかもしれない。真っ暗な夜はやっぱり寂しさも増してしまうから、夜は賑やかな場所に居た方が楽。無駄に泣かなくて済みそう。

…そして、あわよくば、心ちゃんを忘れられる出会いがあればいいな。

第17話：月が照らす道

「ちかこさん、でしたっけ？」

皿洗いをしていたあたしに、後ろから声をかけて来たのは笑顔がかわいいい男の人だった。まだ、名前はわからないけど。

「あ、はい。」

「一服つす。」

「あつ、はい。」

あたしは慌てて濡れた手をタオルで拭い、その人の後に続いた。やつぱりバイトの初日って気を使う分、すぐに疲れてしまう。いいタイミングの休憩だ。

休憩室は窓が開いていて、扉を開けた瞬間風が吹き抜けた。その時、ほのかに香ったのだ。前を歩く人から心ちゃんと同じ香水の匂いが思わずドキツとした。後ろ姿もなんとなく似ている。そう、思い込んだだけかもしれないけど……。

誰もいない休憩室は異様に静かで、少し緊張してしまう。丸いテーブルを挟んで、あたしとその人は向かい合って座った。

「あ、煙草平気ですか？」

「あ、大丈夫です。」

あたしはそう言ってぶんぶんと手を振った。なんだか大袈裟なリアクションで答えてしまった気がする。その人はあどけない笑顔を見せて、煙草に火をつけた。ああ、煙草ってこうやって吸うんだよねあって、改めて思ってしまう。だってあたしはお香みたい煙りを出してるだけだから。

「ちかこさんっていくつつすか？」

「あ、21。」

「えっ、3つ上?!」

男の人がびっくりしたので、テーブルに一欠けら煙草の灰が落ちた。っていうか、あたしもびっくり。この人、3つも下なんだ。笑顔は

確かに可愛いけど、煙草を吸ってる姿はあたしより年上だって言われてもおかしくないくらい、大人っぽい。

「あれっすね。童顔ですな。」

「…よく言われます。」

この人意外とデリカシーのない人だなあ。あたしは口元を引き攣らせて、無理矢理笑顔を作った。そりゃあ、よく子供っぽいって言われるけど、そろそろ大人の魅力つてものに気付いてくれる人が現れてもいいんじゃないだろうか。

「あ、そういえば俺の名前知ってます？」

「あ…ごめんなさい。まだ…」

そう言っただけであたしが申し訳なさそうに俯くと、男の人は気にしないで、と笑った。

「山下大樹です。たぶん、これから1番一緒にいることになると思います。」

「へ？」

山下さんの言ってる意味がわからず、あたしは気の抜けた声を出した。

「親父がちかこさんのこと気に入って。あ、親父って一応この店長で。で、俺の彼女にしようってたくらんでるんすよ。ちかこさんに甘いでしょ？うちの親父。」

確かに言われてみると他の人よりは優しくされてる気はするけど…気に入られてるのかな？

「親父あんまりギャルっぽい好きじゃないんすよね。みんないい人なんですけど。」

「いい人なんだ。じゃあ、安心です。」

あたしはほっと胸を撫で下ろした。とりあえず、店長と山下さんとは仲良く出来そうだし。…まあ、それはそれで面倒臭そうだけど。

その日、月は真つ暗な夜道を照らし、まるであたしの進むべき道を表してくれてるようだった。

第18話：あだ名

あたしにとって、時間は流れているようで止まっていた。自分の周りが時の流れで変化していても、あたし自身は何も変わっちゃいない。あたしは心ちゃんがまだ好き。

あれから半年が過ぎ、悲しみは少し和らいだと思う。寂しさに馴れてしまっただけなのかもしれないけど。

もう、気がつけば季節は夏を迎えていた。

「ちかちゃんって身長いくつあんのー？」

居酒屋のバイト仲間の香はあたしの横に立ち、背比べした。居酒屋でのバイトも最近は楽にこなせるようになってきたし、何よりもこの人達と仲良く過ごしていると思う。香は見た目は1番怖いけど、話してみるとすごい優しく、面白い人。女の子の中では1番気が合うかもしれない。まあ、みんないい人なんだけど。

「マジ、ちっちゃいよね。」

「香がでかいんだよ！」

「いや、ちかちゃんはちっちゃいでしょ。」

「そんなことないよ！」

そんなあたしの必死の訴えに、みんなは手を叩いて笑うばかりだ。一応あたしが1番年上なのに…なんだかみんなに馬鹿にされっぱなし。まあ、これがみんなの愛情表現だと受け止めよう。

…こうやって毎日を過ごしていると、心ちゃんと別々の人生を歩いているんだあって実感する。あたしが新しい出会いをしているとき、心ちゃんもきつと誰かに出会ってる。お互いの毎日を知らずに生きていくことは、やっぱりあたしにはまだ辛い。

すずとは仲良くやってるの？相変わらずあそこで働いてるの？今は実家に住んでるの？ペットの猫は元気にしてる？当たり前にかつていた心ちゃんの毎日。心ちゃんの全て。今はこんなくたらないことまでも、あたしの知らない世界になっちゃったんだね。

正直、あたしの知らないところで、幸せな人生を送っていると考えるのも少し悲しい。まだそこまで大人になれてないのも事実。やっぱり心ちゃんには、あたしとの人生の中で幸せになってほしかった。「ちっこい、ちっこい。」

突然現れて、あたしの髪をくしゃくしゃにしながら言ったのは大樹だった。あの時の大樹の言った通り、店長はあたしを気に入ってらしく…大樹とあたしをくつつけようという意味不明な計らいのせいで、あたしは1番大樹と打ち解けたと思う。大樹も今はあたしを馬鹿にしてばかりで、可愛いげが無くなってしまった。

「ちっこいんだから、ちかこじゃなくて、ちこじゃん。」

大樹はあたしを馬鹿にしてそう言ったけど、あたしは怒ることも笑うことも出来なかった。だって、あたしのことを「ちこ」って呼ぶのは心ちゃんだけだったから。心ちゃんも、大樹とまったく同じ発想だった。今みたいになんちこってあたしを馬鹿にして、それからずっと「ちこ」って呼ぶようになって…でも、もうそんな風にあたしの名前を呼ぶ人なんていないと思ってた。

心ちゃんが最後だと思ってたんだ。…最後にしたかった。これからの人生で、心ちゃんとのいろんな思い出は、きつと塗り替えられてしまっただろう。でも、あたしの人生の中で「ちこ」って呼んだ人は心ちゃんだけだったなあって、おばあちゃんになったときそう思いたかったの。心ちゃんだけの特別な記憶を一生忘れたくないよ。

「ちか？」

そんなことを考えていたあたしは、今にも泣き出しそうな顔をしていたんだろう。大樹は心配そうな顔であたしを覗き込んだ。

「そ、そのあだ名は馬鹿にしてるから無しね。」

あたしは一瞬で気持ちを切り替えて、怒った風にそう言った。

「なんだ、怒ってんの？」

「別に怒ってないよ。とにかくそのあだ名は無し。」

あたしが冷たくそう言うと、大樹はつまんなそうに口を尖らせた。

「…ちえー。」

第19話：蟹とりたい！

みんな海に行こう、と言い出したのは香だった。確かにいい天気が続いているし、海に行くにはちょうどいい頃かもしれない。お店の定休日があるから、だいたいみんな出席出来るだろう。あたしもみんなと海に行くことにした。

運転は小鷹君と大樹。バイトの中で精神的に大人な2人だと思う。女の子3人、香と千秋ちゃんとあたし、それからバイトの中で1番やんちゃな匠は2手に別れて乗った。

大樹の車に乗ることになったのは、あたしと匠。車の中はびっくりするほどテンションが高くて、笑いが止まらなかった。目的地の海に着くまで1時間くらいかかったと思う。でも、全然時間なんか感じさせないくらい、あたしも2人も笑い続けた。おかげで車酔いするあたしは、酔い止めを飲み忘れたにも関わらず、ちつとも気持ち悪くならずに済んだ。大樹の運転が意外に優しく、たつていうのもあるかもしれないけど。

目的地に着いて、周りを見渡すとどこか懐かしい感じがした。…あ、ここは心ちゃんとよく来た海だ。滅多に泳ぐことはなかったけど、蟹を探したりヤドカ리를捕まえたりしたつけ。…やだなあ、こんなところにも心ちゃんの思い出が詰まってるんだ。せつかくみんなで楽しもって時に、少し切なくなっちゃった。

男女別々になり水着に着替えると、あたしたちは大はしやぎで海に向かった。小鷹君と匠はおっきなイルカの浮輪を脇に挟んで、海に入っていく。香と千秋ちゃんは、それに乗りたいとあとをついて行った。あたしは昔海で溺れかけたことがあって、未だに深いところまでは入っていけないかった。だから、心ちゃんとはよく砂場で遊んだんだよね。

「入んねえの？」

「あたしあんまり泳げないんだよね。」

情けなさそうにあたしが言うと、大樹はあたしの背中をドンと押した。

「わっ。」

急な出来事でバランスが取れなかったあたしは、波打ち際にひざまずくように倒れる。

「危ないじゃん！」

「こんなところじゃ溺れねえよ。」

大樹は馬鹿にしたように鼻で笑って、座り込んであたしの腕を引き上げた。

「足着くとこまでなら入れんでしょ？」

「…うん。」

不安そうに返事をするあたしの腕を、大樹は放さなかった。なんだかんだ言って、大樹は面倒見がいいって言うか…こういうときに少し大人に感じてしまう。

「俺、ちかの面倒見役ってみんなに言われてっから。」

…一言余計だけど。

「別にみんなとこ行っていいよ。かき氷でも食べて待つてるから。」

そしてあたしも可愛いげない。本当はありがとうって言いたいんだけど…年上の性っていうやつ？こんなところで一人にされたら、いろんなこと思い出して泣いてしまいそう。実際、さっきから『ちこ』って心ちゃんが呼んでる気がして、馬鹿みたいに振り返ったりしてる。頭の中で何度も心ちゃんの声が響いてるんだ。

「ちかがいなきやつまんねえだろ。からかう相手いねえんだから。」

「はいはい。」

「大体、あいつら付き合ってるみたいなものだし。」

あっさりと言ったのけた大樹の言葉に、あたしは敏感に反応した。香と千秋ちゃんが小鷹君と匠を好きなのは知ってたけど…両想いだっただの？！

「知らなかったの？」

「知らないよ！」

「男どもは今日が決め時だと思ってるよ。」

「そうなんだあ……。」

そんな大事な行事だったんだ。どおりでみんなテンション高すぎるわけだよ。みんな幸せになれるといいね。なんだかあたしまで嬉しくなってきた。

「だから、邪魔者は脇にいないとね。」

「意外と氣い使うんだね。」

「当たり前でしょ。」

少しむんつけたように言った大樹は、あたしのおでこにデコピンをした。

「きつと端から見たら、あたしたちも付き合ってるように見えるんだろ。うな。そりゃ、客観的に見て大樹はかっこいいと思うし、生意氣なところもあるけどまあ、いい奴だし……こんな人が彼氏だったらいいのかもしれないけど。もし、心ちゃんに出会ってなかったら、きつとあたしは簡単に落ちてるだろう。でも、今は誰を見ても心ちゃん以上に思えないんだよね。まだまだ恋は出来そうにないや。」

「なんか違うことするかき氷とかほんとに食いてえの？」
食いたい気はするけど……。うーん、とあたしは悩んだ。そして結局こう。

「蟹とりたい！」

第20話：絵の具

沢山の人で賑わっている砂浜から少し外れた場所で、あたしと大樹は蟹を探していた。ここはちよつとした岩場になって、沢山見つけられるのをあたしは知ってる。だって…心ちゃんが教えてくれたから。

「蟹なんかいねえよ？」

「いるって。ほら、この隙間2匹もいる。」

「あ、マジだ。」

大樹はあたしが指差した隙間に顔を近付け、木の棒で突き始めた。

「ねえ、それ蟹死なない？」

「死ぬわけねえだろ。」

「素手でいきなよ。」

「挟まれんのやだ。」

心ちゃんは蟹が可哀相だからって、そんな手荒にしなかったんだけどな。あたしは大樹から少し離れた場所でヤドカリを探すことにした。ヤドカリは怖くないから、あたしでも捕まえられる。隙間をじっくり探していると、小さなヤドカリが歩いているのが見えた。

「逃げないでね…」

あたしはそおつと貝殻を摘む。

「やった！しん…」

…思わず言ってしまった。ここに心ちゃんはいないのに。

『心ちゃん捕まえたよ』っていつつも叫んだんだ。そしたら、遠くで蟹を捕まえてた心ちゃんが近寄って来てあたしを褒めてくれるの。帰る頃には、バケツの中に2人でとった蟹とヤドカリが沢山いたよね。

…心ちゃん。あたし、一人でヤドカリ捕まえたよ。もう、褒めてくれないの？頭撫でてくれないの？心ちゃん、ヤドカリ大好きじゃん。『ちこ、偉いなあ』って言つてよ。

力の抜けたあたしの手から、ヤドカリはゆつくりと逃げて行った。
座り込んだ自分の膝に涙が落ちる。

…駄目だ、心ちゃん。

やっぱ3年は長いよ。

どこに行ったって心ちゃんとの思い出が溢れてるよ。何度も心ちゃんの幻が目の前を通るよ。心ちゃんは違うの？あたしとの思い出を、次の思い出で塗り替えてしまったのかな。あたしには心ちゃんとの思い出が濃すぎて、塗り替えても塗り替えてもまた浮き上がってくる。心ちゃんとの思い出を塗り替えられる絵の具なんてどこにもない。

「ちか？」

近付いてくる足音が聞こえる。大樹に変に思われるから、泣き止まなくちゃ。…でも、ここに心ちゃんがいてくれたらって、考えちゃうから。やっぱ涙は止まんない。

「何した？こけた？」

ただひたすら泣き続けるあたしは、大樹の問いかけに首を振ることしか出来なかった。

「蟹にやられた？」

「ちがつ…」

「…帰るか。」

大樹は泣いてるあたしを引つ張り起こして、ため息をついた。きつと面倒だと思っただろう。

大樹はあたしの手を引いて、香たちのいる浜辺へ向かった。すれ違う人があたしたちを見てる気がする。喧嘩したカップルのようになにも見えないのかな。大樹、きつと恥ずかしいだろうな。

「ここで待つてられる？俺、みんなに言ってくるから。」

「あたし、大丈夫だから。大樹、みんなといていいよ。」

まだ少し泣きながらそう言うあたしに、大樹はげんこつをくらわせた。

「ちかの嘘ってすっげえ見え見え。嘘つくなら、もっとうまくつい

てくくない？」

年下に見透かされるなんてなんだか恥ずかしい。あたしより大樹のほうが何倍も大人だなあ。

「だから、待ってて。」

「はい。」

今度は素直に返事をする、大樹はみんなのもとへ走って行った。

あたしはいつも、なんだかんだ大樹に助けられてる。お礼の一つくらい素直に言えたらいいのに。

可愛くないな。

第21話：そういえば

帰りの車の中で、大樹はあたしに何も聞かなかった。ただ、来るときよりも音楽を大きく流して、それに合わせて鼻歌なんか歌ったりしていた。会話がなくてもおかしくない状況を、大樹はうまく作ってたんだと思う。でも、そんなさりげない優しさがあたしにはわかってしまうんだ。口に出したら恥ずかしがると思うから、言わなかったけど。

正直、『どうしたの？』って聞いてほしい気持ちも半分あった。

あたしは一人で苦しんでるんだって、可哀相な女なんだって誰かにわかってほしかった。そして、同情でもいいからあたしを甘やかしてほしかった。『頑張ってるな』って誰かに褒めてほしかったんだ。だって、一人じゃくじけてしまいそうだから。もう一度大きな愛情に包まれて、静かに眠りたかった。誰かの優しさに甘えていたかった。そんなのいいことじゃないってわかってるけど。

次の日あたしはバイトを休むことになった。大樹がみんなに『体調悪くなったみたいだから』って嘘をついてくれたらしく、その手前普通にバイトに出るのはちょっと気が引けた。大樹もそれをわかっていたから、あたしとシフトを交換してくれたのだ。お世話になってばかりで、本当に申し訳ないと思う。

急に休みになったおかげで、あたしはなにもすることがなく家でぼーっと過ごしていた。

夕方近くになつて、香からメールがきた。

『体調大丈夫？』題名にそう入っている。今日休むことを今知ったんだろう。『昨日ゆっくり休めた？今日会ったら報告したいことがあったんだ。』その先はなんとなくわかった。『休みみたいだから、メールで報告。昨日から小鷹と付き合うことになったよ！』予想していた通りの内容だった。昨日大樹が言っていたことは、本当だったらしい。あたしはすぐに『おめでとう』のメールをした。それか

ら数分後、千明ちゃんからもメールが届き、こちらもうまくいったことが報告された。

みんな、幸せになるうね。そんなことを考えながら、ふと大樹の顔が浮かんだ。そういえば大樹は誰か好きな人いないのかな。みんなが幸せになりたいから、大樹の応援もしたいけど…何しろ大樹の好きな人なんて聞いたことない。いつもお世話になってる分、恩返しなくちゃ。

お節介って思われなきゃいいけど…。

第22話：わかんの。

「で？」

「は？」

休憩に入るなり大樹に詰め寄って問い掛けたあたしに、大樹は当然迷惑そうにそう言った。

「『は？』じゃなくて。好きな人いないの？」

「何、突然。嫌な予感するんだけど。」

「何でよ！」

「協力する、とか言うんでしょ。」

大樹は煙草に火を付けて、眉間にシワを寄せた。何でこんなに迷惑そうな雰囲気醸し出しているんだろうか…。

「いないの？」

「…いるよ。」

意味深な表情でそう言うのと、大樹はあたしに煙りを吹き掛けた。

「ちよつと！」

あたしは手で仰いで煙りを大樹に返した。…今の表情はなんだろう。本当にあたし協力するよ？お世話になってる、お礼っていうか…。

「

「いらねえし。そんなこと言うなら、もっとしっかりしろよ。」

「うつ…。」

まあ、確かにね…。あたしは何も言えなくなり、ただ俯いた。結局大樹には敵わない。

「ちかつてほんと単純だな。みんなが付き合ったから、俺もって思っただろ？」

あたしは一つ頷いた。

「安心しろよ。とうぶん、付き合っつもりないから。」

「…何で？」

「誰でもいいわけじゃないし。」

「好きな人いるんでしょ？」

ちらつと目をやると、大樹は困ったような顔をして窓の外を見ていた。

「それが脈無しだから。」

「そんなのわかんないじゃん。」

「わかんno。」

呆れたようにため息を着いた大樹に、あたしは少しむっとした。あたしは行動する前から諦める人間が嫌いだから。

「何で？」

「好きだから。」

そう力強く言った大樹の言葉にあたしは息を飲んだ。本当に好きなんだと、その言葉で伝わって来たから。あたしも心ちゃんを本当に愛してたから、心ちゃんの気持ちがあった。大樹もそんな感じなのかな。

「別に俺、長期戦でいくつもりだし、気にすんなよ。」

煙草の火を消して、立ち上がる大樹が今までよりも男らしく見えた。あたしもくよくよしてらんないなあ。

第23話：友達

夏の暑さも和らいだ9月末。

約1年ぶりに高校時代の友達と飲み会をすることになった。毎年このくらいの時期になるとメールが回ってくる。仲良しだった同じ部活の友達。中には結婚した人もいるし、未だに恋をしたことのない人もいる。そんなみんなと人生について語るのは、すごく楽しい。まあ、そんな語れるほど年はとってないけど。

でも、今日は別れたことを報告するはめになるだろう。何せあたしは昔から嘘が下手だったから。

飲み会は地元でやることになった。卒業後地元に残った人が多いから、こればかりは仕方ない。地元はあたしの大好きな場所だったけど、心ちゃんと別れてから、行きたくても行けない場所になっていた。あそこに行ったら、あたしはきつと無自覚に心ちゃんの姿を探すだろう。…2人並んで歩いてる姿はなるべく見たくないけど。

「かづみー！久しぶりい。」

「あー、ちかあ。元気だった？」

学生時代、1番仲の良かったかづみが駅まで迎えに来てくれた。

「…かづみ痩せた？」

「わかる？ちよつとダイエットしてんの。」

かづみはニツコリ笑ってそう言ったけど、それが嘘だということにはすぐに気付いた。

もともと、ダイエットをするような子じゃなかったし、いつもの笑顔と違ったから。この歳になって、友達に相談するのが恥ずかしいのだろうか。それとも、無駄な心配はかけたくないと大人ぶってるのだろうか。どっちにしろ、あたしにはかづみの嘘が気に食わなかった。何があったのか、はつきりはわからないけど、おそらく彼氏がらみだと思う。

「…かづみ。あたし心ちゃんと別れたんだ。」

「えっ？」

かづみはびっくりした表情を見せたけど、すぐに笑顔を取り戻した。
「嘘でしょー？」

本当にあたしの告げた事実を、かづみは嘘だと思ってるんだろう。
あたしたちをよく知っていたし、あたしが結婚すると言っていたのもわかってるから。

「嘘じゃないよ。」

少し困ったように言っただけなのに、かづみは表情を曇らせた。

「ほんとに…？」

「いろいろあつたんだよ。」

「え、だって…考えられないよ…」

かづみは泣きそうになりながら、震えた声でそう言った。きっとあたしの声のトーンで、心ちゃんから離れていったと察知したんだろう。

「…大丈夫？」

かづみの問い掛けにあたしは首を横に傾けた。大丈夫な気もするし、そうでない気もする。でも、別れた頃に比べればだいぶマシになったかな。

「…あたしもね、涉と別れたんだ。」

「…そっか。今日は語り合えそうだね！」

あたしはかづみと手を繋ぎ、腕をぶんぶん振って歩き始めた。まるで子供の頃に帰ったみたいにはしゃぐあたしに、かづみもつられて笑った。20を過ぎた大人の大人が、手を繋いで歩くなんて少し恥ずかしいけど、これも友情ってことでありでしょ？

「…聞いてもいい？」

「いいよ。」

かづみは何を聞きたいのか、あたしにはわかっていた。でも、とても言いずらそうにしているので、あえてあたしはかづみの言葉を待つことにした。

「…まだ好き？」

「…今はね。」

「いつ別れたの？」

「2月。」

「そっかぁ。」

その後少し沈黙が流れて、かつみは立ち止まった。きょとんとした顔でかつみを見ると、かつみは大きく息を吸い込んだ。

「会いたい？」

今回の質問は超難問だった。余計な考えを省いて、素直な気持ちで答えるなら…会いたい。でも、会ってどうなる？心ちゃんはもう違う人生を歩んでる。その姿をまじまじと見たって悲しくなるだけ。何も話すことは無いし、普通に話せる自信も無い。会いに行ったら、忘れるのが遅くなるだけだ。

「…あたし、ちかの気持ちよくわかるよ。どっちを選んでも後悔すると思う。だから、1番正直な気持ちを選んでもいいんじゃないかな。」

どっちを選んでも後悔する…確かにその通りかもしれない。かつみは渉君に会ったのかな。でも、あたしには会って話しをするとか、そんなこと考えられない。心ちゃんがどれだけ悩んであたしと離れたかわかってるから、気安く会いに行ったり出来ない。心ちゃんが困るのが目に見えてわかる。でも…やっぱり…

「…遠くから見ただけでもいい。心ちゃんをもう一回だけ見たい。…ついて来てくれる？」

不安そうに問い掛けたあたしに、かつみは

「いいよ。」

と笑った。

第24話：見納め（前書き）

更新遅れました　… っつても、訳がありましてっ（o>o>o）o
実は食中毒で寝込んでたのです！ いやぁ、辛かった… もお元気です
ケドね　また、更新頑張ります（・　　） 皆さん応援していただけ
たら嬉しいです！ 感想なんかもいただけたら… お願いします！！

第24話：見納め

緊張で頭がどうにかなってしまいそうだ。かづみと繋いでいた手は、じつとりと汗ばんでいた。

「そんなに強く握んなくても離さないから。」

かづみはそう言って笑顔を見せてくれた。…心ちゃんを見たいけど、見るのが怖い。びくびくしながら、一度も仕事場に顔を向けず、ただかづみが導いてくれる道を歩いた。

「ちよつと！見つかるから！」

あたしがあまりにびくびく歩いていたせいか、かづみはあたしの手をおもいつきり引つ張りながら、そう言った。だって、思うように足が動かないんだ。あたしが悪いんじゃないよ？

「ここら辺から見れば、大丈夫じゃない？」

ここなら調度よく木とか看板で隠れられる。

ここからこつそり覗くのかあ…ストーカーみたい。ちよつと気が引けたけど、あたしはそつと仕事を覗いた。心ちゃんの姿はすぐに目に入った。どんなに遠くにいたって、どんな人込みの中にいたって、あたしは必ず1番に心ちゃんを見つけられる自信があるから。例えこの目が見えなくなっても…感じるんだ、心ちゃんの呼吸。

「いた？」

隣から同じ様に覗いているかづみに、あたしは

「うん。」

とだけ言った。心ちゃんは髪の毛を思い切り短く切っていた。心ちゃんのあんな髪型を見たのは初めてだった。…短いのも、よく似合うんだね。

少し痩せたかな？髪型のせい？ぼーつとしてる…元気ないのかな。心ちゃん、今どんな毎日を送ってるの？ちゃんと幸せ？笑って過ごしてる？やっぱりあたしには心ちゃんが全てだから、心ちゃんが幸せじゃないと悲しいよ。今のあたしには、心ちゃんを幸せにする力

なんてとてもないけれど。

…声が聞きたい。心ちゃんに触りたい。好きって言いたい。抱きしめてもらいたい。嘘でもいいからなんて思わない。…もう一度愛してるって言ってほしい。

見ちゃいけなかったのかも。また一層好きになった気がする。思い出した…心ちゃんの荒れた手や、子供に話しかけるみたいな優しい声のトーン。あたしを見つめる目。今でもこんなに愛しいよ。心ちゃんの全てが愛しいよ…。

あたしは何の為にここに来たんだろう。

どうして、諦めが鈍るようなことするの？好きだと、今でも愛していると、そう確認するだけだとわかっていたのに。

こんなの全然前に進めない。

でも…会いたかった。

会いたくて会いたくてしょうがなかったの。毎日苦しかったの。愛してる人を見ていたい気持ちには、誰にだってあるでしょ？それを我慢するのはすごく辛いんだ。…本当は、これから諦めなきゃいけない人間は、この欲求に打ち勝たなくちゃいけないんだよね。違う道を歩いていくために。悲しいけどそれが現実なんだよね。これが見納め…かな。

力が抜けて座り込むあたしの頭を、かづみはずっと撫でてくれた。

第25話：背中を押して

後ろ髪を引かれる思いであの場を立ち去り、あたしとかづみは飲み屋に向かった。かづみは何も言わず、ただ手を握って歩いてくれた。それが嬉しかった。飲み屋に着く頃には、あたしもぽつりぽつりと話し始め、かづみも笑ってくれたりした。

…きつとかづみも別れた彼氏に会いに行ったことがあるんだろう。そしてあたしと同じことを思ったんだと思う。

かづみもあたしも諦めの悪い女。まあ、良く言えば一途な女ってことでしょ？…なんて都合よすぎかな。

もちろんあたし達だって、こんなところで立ち止まっていたいわけじゃない。ただ、『ああ、この恋は叶わないんだ』ってわかったから諦めがつくとか、そんな簡単じゃないだけ。心ちゃんがまたあたしを好きになってくれるとか、戻って来てくれるとか、そんな甘い考え、本当はとうに無くしてる。

だってそんな期待何回も打ち砕かれて、その度に泣いているんだから。でも、期待なんかしてなくても、好きという気持ちだけは残ってしまつて…どうしようもないから、理由が欲しくなる。『心のどこかでは期待してるから、諦めつかないんだよね』って、そうごまかすしかないんだ。

本当はちゃんとわかつてる。かづみも、あたしも。もうどんなに思ってもあんな幸せな日々は戻って来ないって。ただ人間の心が少し複雑に出来てるだけなんだよ。だから、重たいとかしつこいとか、そんな風にとらえてほしくないな。…自分自身をそんな風に思いたくないな。

飲み会であたしもかづみも別れたことを暴露した。

ガンガンお酒を飲みまくって…半分酔いに任せて。でも、みんなも酔ってるせいか、笑い飛ばされて終わりだった。悲しくはなかった。別に同情してほしかったわけじゃないから。こうやって笑い飛ばし

て『次はもつといい男見つける』って背中を押してもらいたかったんだ。だからあたしは泣くほど嬉しかった。言葉には出さなかったけど、ありがとうってみんなに言ったんだ。何回も何回も。

第26話：アッシー

「この、酔っ払いが！」

そう言つて、あたしにげんこつを喰らわせたのは大樹だった。

「いたーい。」

ケラケラと笑っているあたしに、大樹は呆れてため息をつく。

「じゃあ、ちかのことよろしくです。」

かづみが大樹に頭を下げると、大樹も小さく頭を下げた。かづみはあたしのお母さんみたいだね。

「ちか、じゃあねー。」

「まっただねえー！」

手を振るみんなに、あたしは人一倍大きな声で返事をし、ぶんぶんと手を振った。そしてその手が大樹の肩に当たり…案の定、また怒られた。

「早く乗れ。」

「…はあい。」

怒られてばかりのあたしは、口を尖らせてそう言った。

「だいたい俺、お前の彼氏でもなけりゃ、アッシーでもねえんだからな。」

「そんなに怒らないでよお。電車なくなっちゃったんだもん。」

「そんな時間まで飲むな！」

「だって、盛り上がっちゃったからー。」

最初は本当に、みんなより先に帰る予定でいたんだ。帰る電車がなくなる前に。でも…飲み会だからね。こういうのお約束でしょ？そんなこと言ったら、また怒られちゃうから黙っとくけど。

「俺来れなかったらどうしてたんだよ。」

「誰か呼んだ。」

「他に呼べる奴いるなら、そっちに頼めよ！せっかくの休みだったのに。」

「だって彼女いないの大樹だけじゃん。あたし彼女の反感買うのやだもーん。」

そんなことを言ったけど、本当は大樹しか思い浮かばなかったんだ。こんなとき甘えられるのは大樹しかいないし、こんな迷惑なこと引き受けてくれるのも、大樹しかいないと思った。でも、さすがに今回は怒ってるかな。

「…なるほどね。まあ、いいけど、今度飯おごれよ。」

「かしこまりましたあ。」

あたしは大声でそう言って敬礼をした。運転している大樹が迷惑そうな目で、一瞬だけあたしを見る。酔っ払ってるんだから許せ。とか、思ってみたり…。

「…気持ち悪くねえ？一応安全運転してっけど。」

「…やつさしー。」

あたしはキラキラした目で大樹を見上げた。

「あ？」

「…大樹はいい男だねー。」

だから、つい甘えたくなる。大樹の優しさに心ちゃんの優しさを、たまに重ねてる気がするんだ。心ちゃんと一緒にいた頃みたいな、甘ったれのあたしでも、大樹は愛想を尽かさず傍にいてくれそうだから。…あたしってずるい女だなあ。

「そう思ってたんなら惚れるよ。」

「…？」

この時はまだ大樹の言った言葉の意味が、よくわからなかった。

第27話：キャンプ

「ちかつてまだ大樹と付き合っていないの？」

何の脈絡もなく突然そんなことを言われ、あたしは持っていた携帯を落とした。

「えっ、もう付き合ってたんの!？」

「いや、付き合っていないから!」

「なんだあ…」

ため息を着くように香と千秋ちゃんは、呟いた。

「びつくりするじゃん、急に…。」

「だってさあ、いっつも一緒にいるのに何で恋に発展しないわけ？逆に疑問だよな。」

うんうん、と香の言葉に千秋ちゃんは大きく頷いた。やっぱり周りから見れば、あたし達も付き合ってるように見えるんだろうなあ…。あたしはいいとして、大樹はきつと迷惑に思ってるだろう。それでも何も言わず傍にいてくれる。あたしの居心地のいい場所を与えてくれる。あたしは大樹の優しさに甘えてばかりだ。「おら。喋ってねえで準備しろ。」

そう言って後ろから大樹にどつかれ、あたしはまた携帯を落とした。何かと大樹はあたしを殴る。もちろん本気じゃないけど。さりげなくストレスを解消してるんだろうか。まあ、大樹の大半のストレスはあたしだろうから、反抗しないでおう。

「はい、すみませーん。」

香と千秋ちゃんはそそくさと彼氏のもとへ。

きつと2人とも優しくされてるんだろうなあ。彼氏べったりだし。この6人は仲良しだし、しょっちゅう遊んでも飽きないけど…あたしと大樹が残り者になるんだよね。誘ってくれるのはありがたいけど、こういう機会があればあるほど、あたしは大樹に甘えてしまう気がして嫌。今日のキャンプだって、前日まで断ろうかどうか悩ん

でたし。

「にしても、あいつら気合い入りすぎだろ。」

「そりゃ、楽しみにしてたもん。」

「ちかは用事あったとかじゃねえの？」

「え？いや、ないけど？」

「なら、いいけど。お前来るのしぶってたし、用事でもあったのかと思って。」

こういうとき大樹って人のことよく見てるなあって感じる。嘘が見破られるって言うか、心が見透かされるって言うか：そんな気がするんだ。

「大樹って人のことよく見てるよね。」

「：俺が見てんのは、ちかだけだね。」

「えっ?!」

大樹が突然低い声でそう言ったので、思わずドキツとした。あたしは慌てて目を逸らす。

「ぷっ。お前、勘違いしてんだろ？」

「べっ、別にっ。」

「調子のんなよ。」

「乗ってないよ!」

：とは言ったものの、実際調子乗ってるのかも。

このままの関係が続けばいいと思ってる。大樹の恋を応援するとか言っておきながら、心のどこかではそれを否定してた。大樹が他の誰かのものになるのは嫌だ。別に今だってあたしのものってわけじゃないけど。もし、彼女が出来たらあたしの傍にいるわけにはいかないだろうし：そうなると少し辛いなあ。嫉妬とかそういうんじゃない。ただ今のあたしには大樹の存在が必要だと思うから。かなり勝手なことを言ってるのはわかるけど：大樹の存在が、倒れかけてるあたしを支えてくれるのは事実だ。

：やっぱりあたしって人間はずるい。

第28話：変な期待

「じゃあ、こちら彼氏んどこ行くから。」

「へ？」

あたしは口をぽかんと開けたまま、立ち上がった2人を見上げる。

「お約束じゃーん？」

「大丈夫だよ。代わりに大樹が来るから。」

「えっ？ いや、意味が…」

ちよつと嫌な展開になつてきた。

「信じるものは馬鹿を見るんだよ？」

語尾にハートマークでも着いてるかのような可愛い口調で、千秋ちゃんは酷いことを言つてのけた。

「…それはまずいんじゃない？」

「まずくない、まずくない。」

「じゃあ、また、あ・し・た」

「やつ、ちよつ、待つて…」

香の服の裾をぐいつと引つ張つてみたものの、脅迫じみた2人の笑顔に圧倒され、あたしは仕方なく手を離れた。

「ごめんねー。」

全く悪びれる様子の無い顔で2人はそう言い残し、部屋を出ていった。

「…。」

んー…まいったぞ？

あまりの急展開で話がわからないと思うので、軽く今の状況を説明致します。

今回のキャンプは別に本格的なものではなく（まあただ単にみんなで騒ぎただけなので）内容は小学生の合宿みたいなものだった。もちろんテントなんかなくて、近くのパensionを借りていたわけ。事前にあたしが聞いていた話では、今回借りた部屋は2つ

で女部屋と男部屋に別れるってことだったんだけど…実際借りた部屋は3つで、恋人同士で過ごしましょってことらしい。結局あまりもののあたしと大樹が、同じ部屋で過ごすことになってしまっただけど…こちらは決して恋人同士じゃあない！香も千秋ちゃんもいくら自分がラブラブしたいからって、こんなの酷すぎる。鬼だ…。いくら相手が大樹だっていつても、やっぱり男の人と一晩中2人きりで過ごすのは緊張する。そんなことより、こんなに緊張してることが大樹にばれたら…徹底的に馬鹿にされるに違いない。どうにか隠さなきゃ。

「やられたな。」

そんなことを一人悶々と考えていたあたしは、突然後ろから大樹の声が聞こえてびくつと肩を上げた。

「ちよつ、ちよつと！女の子の部屋なんだからノックぐらいしてよ！」

振り返ってみたものの、何だか変に照れてしまつてうまく顔が見れない。

「女の部屋とか言われても、今日は俺の部屋でもあるし。」

「あ…そ、そうだね。」

「まあ、しょうがねえよ。いまさはどうしようもねえし。」

テンパっているあたしとは違い、大樹は全く動揺してない様子でそう言い放ち、座り込んでいるあたしのすぐ横にあるベットに腰を下ろした。

「そう…だね。」

観念したあたしはがくつと肩を落とし、ため息を着く。あたしばかり緊張して馬鹿みたい。…大樹をかばちゃだと思おう。そうしよう。

「何考えてんの？」

「いやっ、いやー？何も？」

思わず声の上擦って…当然大樹に笑われた。おそらく、あたしが緊張してるのはバレてるだろう。

「やだー。ぼく、そんな変態じゃないんですけどー。」

「わかってるよ！大樹をそういう目で見てるとか、そういうことじゃないくて…。」

そうだ。大樹は天地がひっくり返ってもあたしに手を出さない。そういう男じゃ無い。じゃあ、何であたしは緊張してるんだろう？変な期待でもしてるのかな。わかんないや…。

「ちかじゃ立たない。」

「何が？」

「俺の息子。」

「…あつそ。」

前言撤回。こんな男に変な期待なんかするわけねえー！

第29話：4回目の記念日

『一夜の過ち』なんてあたし達の間には有り得なかった。もちろんそれ以降も、周りの期待を裏切って、あたし達の関係は一切変わらなかったし。あたしにとつて大樹の存在がすごく大きいってことはちゃんと感じてる。でも、それが恋愛感情かと聞かれると…答えは『NO』だった。あたしは大樹に心ちゃんの面影を重ねてるだけだ。香水の匂いも、煙草の匂いも、笑ったときに見える八重歯も…全部心ちゃんを思い出させる。大樹の傍にいたいと思う気持ちは、ただ単に心ちゃんを忘れられないあたしのエゴだと思う。心ちゃんの代わりでいいから傍にいて…そんな勝手なこと考えてる自分が嫌い。

そして今日は11月5日。本当なら4年目の記念日を、楽しく心ちゃんと過ごしてたはずなのにな…。あたしは一人でいつもの場所に來ていた。わざわざタクシーまで使って、こんなところで何をするつもりなんだろ。いくら待ったって心ちゃんは來ないのに。

さすがに夜は冷え込んで、あたしは薄着できたことを後悔していた。冷たくなってきた手を、ぎゅっと握りしめ、あたしはゆっくり目を閉じた。頭の中にはあの頃と変わらない心ちゃんがいる。一緒に夜景を見ながら、ちつともロマンチックじゃない言葉で愛を確かめ合っ。お互い照れ屋だったから、真面目な空気が苦手で、あまり言葉にはしなかったかもしれない。でも、繋いだ手とか重ねた唇とか、そういうものだけでも十分気持ちは伝わった。心ちゃんのおつきなパーカーの中に、あたしも無理矢理入って…凄く凄く暖かくて…本当に幸せだったのに。

長い夢だったらしい。心ちゃんがない世界なんか、夢だったらしいんだ。あたしは心ちゃんがないと息の吸い方もわからなくなる。苦しくて苦しくて。こんな世界もう嫌だ。いくら哀しさに馴れたって、きつと消えることはない痛みがあたしを苦しめる。心ちゃんじ

やなきや嫌だよ。知ってるでしょ？あたしわがままなんだ。

「会いたいよっ…。」

とめどなく涙が流れた。誰かに見られたら恥ずかしいとか、そんな気持ちも押し潰してしまうほど、ただ悲しくて寂しくて。満たされない。全然満たされないよ。

今まで貯まっていた分沢山泣いて、あたしはまたタクシーで家に帰った。あっという間に11月5日は終わった。

第30話：来年になったら（前書き）

更新だいぶ遅れて申し訳ないです　実はこの話と同じ状況になつてしまい…しばらく何も出来ませんでしたm(_____)m自分の書いてる話は元々考えていた結末にするつもりです!!あたしの恋愛とは違う形ですね…とりあえず、少しずつ回復してきてるのでまた書いて行きたいと思います　応援よろしくお願いしますo(∩_∩)o

第30話：来年になったら

愛してる人が生きていればそれで幸せ。愛してる人が幸せならあたしも幸せ。そんな綺麗ごとをずつと心の中で思っていた。本当はそんなことちつとも思えてないことくらい、だいぶ前から気付いているけど。

あつという間に終わった4回目の記念日は、ただあたしに空しさを感じさせた。考えても意味がないのに『どうして駄目になったんだろう』とか思っちゃって。やっぱりあたしは心ちゃんの隣りがいいって再確認した。

最近はまだ泣かないでいたのに、また泣き虫になっちゃった。あたしはバックから煙草を取り出して火をつけた。心ちゃんの匂いがあたしの身体を包み込む。

「ちか？…煙草吸ってんの？」

休憩室に入ってくるなり、初めて見るあたしの姿に大樹は驚いた。

「吸ってないよ。煙出してるだけ。」

「は？」

そりゃあ理解してもらえないよなあとあたしは笑った。煙出して遊んでるなんて、ただの馬鹿だ。

「あ、大樹煙草吸うでしょ？勿体ないからこれ吸ってよ。ちよつと口つけちゃったけど。」

「いつつも煙出して遊んでんの？」

「そ。」

「ふうん。」

大樹はあたしの指から煙草を取って、ゆっくりと吸い始めた。なんだか、煙草の吸い方まで似てる気がする。こんなにそっくりなのになんであたしは心ちゃんじゃなきゃ愛せないんだろう。大樹を好きになってもうまくいくとは限らないけど。

「そういえば、新しいバイト入るんでしょ？」

「ああ、香の友達らしいよ。一気に2人取るんだって。まあ、今人足りないし、これから忙しくなるし。」

「そっか。…落着いたら免許とろっかなあ。来年あたりにでも。」
ふっと思いつたことだった。やっぱり車がないのは辛いし、何かと不便だ。この年で自転車に乗るのもなんとなく恥ずかしいし。

「それはお勧めするね。またアツシーにされたんじやたまんねえし。」

ぶっさいくな顔で煙草を吸いながら大樹はそう言った。確かに大樹には沢山迷惑をかけた気がするから…そこは言い返せない。バイト帰りだってほとんど送って貰ってるし。

「頑張つて免許とります。」

「頼みますよ。」

「はい。」

少しずつだけ貯金はしてたし、なんとかなるでしょ。来年から時間の余裕も出来るだろうし、なるべく早めに取っちゃいたいな。なんだかやりたいことが見つかったら、少し楽になったかもしれない。毎日を過ごしていく目標みたいなのが必要なんだなあ。

来年までいっぱい稼がないと！

第31話：必要な人（前書き）

とてつもなくサボってしまいました。読んでくださっていた皆様ホントにごめんなさい！！いろんなコトがありました…（^ ^ ;）恋愛ってほんとにすごいですね。力をくれたり奪ったり…あたしはまだまだ子どもなんだと思い知らされました。こんな未熟なあたしですが、これからもよろしくお願いいたします（<—>）

第31話：必要な人

春から自動車学校に通い始め、ゆっくりマイペースに免許をとり、バイトを掛け持ちしてお金を貯め…ようやく自分の車を買ったのはもう枯れ葉が散り始めた秋だった。

やることもいっぱい、この1年近くはあっという間に過ぎた気がする。

…今でも心ちゃんのこととは時々夢に見る。でも、昔みたいに逢いたくなくなったり、声が聞きたくなくなったりする日は極端に減った。毎日忙しかったおかげかな。正直まだ好きだけど、昔を思い出して泣くこともない。相変わらず部屋の匂いは変わらないけど、写真もプリクラも見たりしない。少しずつ少しずつ時間に癒されてるんだと思う。

「お待たせしました。」

「…ん。」

あたしがそう言って助手席に乗ると、大樹は体を起こしてハンドルを握った。

今日は大樹に送ってもらった最後の日かな。明日は納車の日だから。思い返してみると、本当に大樹にはお世話になった。いつもあたしの傍にいてくれたし、仕事の送り迎えだって必ずしてくれた。…感謝しきれないよ。

「明日からは自分の車で出勤するから安心してね！今まで色々面倒だったでしょ。」

「別に。俺が好きでやってたことだし。」

「…そ、そっか。」

最近の大樹は変に優しく、なんだかこっちが調子狂っちゃうよ。妙な間があいたので、あたしは何か話題を探した。

「そっいえば…」

「あのさー、突然で悪いんだけど俺と付き合って。」

「…へ?!」

…思考回路が停止した。本当に突然過ぎるよ…って、それより本気で言ってるの?! ホント最近の大樹は何考えてるのかさっぱりわからない。

「困るのはわかるんだけどさ、黙られるとさすがに俺も恥ずかしいんだけど。」

「あ、はい、そう、ですよ…ね。」

「そうですよねって…」

大樹はいつもどおり八重歯を見せて笑ってる。からかってるのかな…きつとそうだよ。大樹には好きな人がいるわけだし。

「言っておくけど冗談じゃねえからな。本当はこんな早いタイミングで言うつもりはなかったんだけど。」

「えっ、いや、でも、大樹好きな人いるって…」

「アホか! それがちかなんだろ。わかれよ…」

大樹はいつもと全然変わらない口調でそう言ったけど、チラリと盗み見た横顔は少し照れくさそうだった。あたしも思わずカァッと頬が熱くなるのを感じた。そりゃ、好きだなんて言われて嫌な気はしないけど…でも、今のあたしにはなんて答えればいいのか全然わかんない。断れば大樹との居心地のいい関係は終わっちゃうだろうし、だからってまだ心ちゃんのこと忘れてないのに付き合うなんて…。

「ちかがさ、元カレを引きずってるのは分かる。」

「えっ!?!? なんで…」

あたしそんなこと一言も…。香にも千秋ちゃんにも言ってるのに…

「どこに出かけてもキョロキョロして、誰か探してるみたいだったし。俺じゃない誰かを見てるのはわかってたから。」

…やっぱり大樹はエスパーだ。あたしのことなんでもお見通しなんだね。

「だからまだ言わないほうがいいかなって思ってたんだけど。俺の送り迎えの役目終わっちゃうと、あんまり話す暇もなくなるしさ。今日のうちに言っとこーと思って。」

「でもっ…やっぱ何か信じらんないよ。全然そんな素振りなかったし…」

「みんな俺の気持ちには気付いてたと思うよ。ちかぐらいだってわかってなかったの。」

あ、そっか…。だからみんないつもあたし達をくっつけようとしてたんだ…。あたしホント馬鹿だ。なんでずっと気付かなかったんだろ。それに…自分辛いからって大樹の気持ち利用して、いつも甘えて…最低だ。今だって…これが嘘だったらしいのにつて思ってる。

だって…あたしはまだ心ちゃんのことを忘れられてないから、大樹と付き合うなんてやっぱり出来ないし。でも、だからって大樹を失うのも怖いんだ。結局あたしってずるい人間。

「俺はずっと我慢してたよ。んで、ちかも頑張った。だからもう、甘えたらいいじゃん。」

「でも、あたしまだ…」

「今はまだ好きでもいいよ。とりあえず俺はちかと一緒にいたいし、気持ち隠してんの面倒になったから言っただけ。あ、別にちかのためとかじゃねえよ？俺がちかの弱味に付け込んでんの。」

弱味に付け込んでるのはあたしの方なのに…大樹は優しいね。

「心配しなくても突然襲ったりしねえよ。」

からかう様にそう言っつて、大樹はあたしの頭をくしゃくしゃにした。甘えていいのかな。大樹の優しさを利用して、あたし最低な人間になっちゃうんじゃないかな。でも、大樹の傍にいと気持ち落ち着く。心ちゃんの隣りにいた時みたいに温かい気持ちになれる。まだ今は心ちゃんを越えることはないかもしれないけど、大樹ならきつといつか好きになれる気がする。

ねえ、心ちゃん。あたし前に進んでもいいかな。傍にいてくれるこの人に賭けてみてもいいかな。気がつけばあれから2年近く経ったんだね。もう、いいよね…。

「大樹…ありがとう。」

第32話：報告

「ちか、煙草取って。」

「ん。」

あたしは大樹のロッカーから煙草を取り、手渡す。そんなありきたりの光景をマジマジと見つめる香達…。

「…お前ら見過ぎ。」

「だつてえ。」

香達はニヤニヤと笑い、『ねえ』と声を揃えて言った。

「ずっと応援してたかいがあったよ。」

小鷹君の一言にみんなが頷く。あたしは恥ずかしくなって下を向いた。

「これで今度から6人で遊ぶ時は気い使わないで済むね。」

そんな香の一言に

「お前ら気い使ってたの？」

と、大樹は大袈裟に驚いて言った。

確かにみんな好き勝手やってなあ…と改めてあたしも笑った。お泊まりの時だつて大樹と2人きりにされたし、気い使ってたなんて到底思えない。

「これからはお泊まりも有りだね。」

千秋ちゃんがサラツと言った言葉にあたしは固まった。大樹と付き合うつて決めたものの、まだそういう『行為』は考えたくなかったから。手を繋ぐのですら何か違和感があつて、照れくさくて…ああ、これから先が思いやられる。

「あのキャンプの時は大樹地獄だったろうからね。可哀相でしょうがなかった。」

『可哀相』なんて言いながらも小鷹君達は笑った。きっとその日もみんなコツソリ笑ってたんだろう。

キャンプの日、大樹はあたしよりも普通で…全然そんな素振り見せ

なかったのに。…平気なふりをしていたんだろうか。だとしたら、かなりのボーカルフエイスだ。

「…まあ、しばらく地獄は続きそうだけど。」

溜め息混じりに言った大樹の言葉に、みんなはいっせいに笑うのをやめ、そして憐れんだ目で大樹を見た。

「変な目で見んなよ。」

「もしかしてキスもまだなの?!」

「……………」

顔を赤くして黙り込むあたしの横で大樹は

「俺意外とシャイだから。」

なんてかっこつけた。本当はこの前されそうになったんだけど…。お察しのとおり、あたしはそんな大樹を受け入れることが出来なかった。もう付き合ってから1ヶ月以上経つのに…。自分が情けない。子どもじゃないんだし、キスくらいちゃんとしなきゃ。

第33話：ちゃんと向き合っね（前書き）

毎回毎回更新がとんでもなく遅れてしまい、申し訳ないです 読
んでくださってる方に感謝します（、、。） 気長に読んでいただ
けると嬉しいです！！今はだいぶ元気なので、なるべく早く更新し
てこの話を完結させたいと思います
よろしくお願
いしますm（――）m

第33話：ちゃんと向き合っね

「…そんなにかまえられるとする気が起きない。」

大樹は溜め息混じりにそう言っ、あたしの肩から両手を離れた。

「ご、ごめんね？な、なんかまだ、恥ずかしくって…」

「いーよ。待つって言ったの俺だし。」

そんなセリフとは裏腹に、大樹はとても機嫌の悪そうな顔をしている。そりゃあ、キスもエッチもなしで半年も付き合ってれば…誰だってこうなるよね。

さつきは恥ずかしいなんて言っただけ、実際はそうじゃない。確かに照れくさいってのも、2割くらいはあるかもしれないけど。

本当は、目をつむると、心ちゃんが浮かんで来ちゃうから。だって、キスするとき他の男を想像しながらなんて…そんなの失礼だもん。いつそのこと、考える隙を与えないようなタイミングでキスしてくれたらいいのに。大樹は優しいから、強引になんてしたくないんだろっけど。

「ちか。今度さ、旅行いかな？」

「あー、うん。どこいくの？みんなに言っただ？」

この場合の「みんな」ってのは、いつもの仲良し6人メンバー。しよっちゅう6人で遊んでるから。

「いや、俺が言っただけのは、2人で。」

「えっ…そ、そっちなあ！」

変な空気を和ませようと、無理に笑ったのがいけなかった…。余計変な空気になっちゃったよ。

「…やめとく？」

やめときたい、できれば。でも、ここでやめたら、きつとあたし達は先に進めないまま。こうゆう機会を無理にでも作らなきゃ、ダメなんだと思う。いつまでも大樹に甘えてちゃダメだ。…腹くくんない。

「…やめとかない。」

「…ん？」

「やめとかないよ。行こう？旅行。」

たぶん、あたしの返事が意外だったんだと思う。大樹は目をおつきくして、あたしを見てる。

「…本気？」

「…うん。マジ。」

あたしはごくりと唾を飲む。

「じゃあ、今度パンフレット見に行くか。」

あ、また、ポーカーフェイス。でも、今日は少し隠し切れてない。耳がほんのり赤いよ。

大樹…あたし、ちゃんと向かい合うからね。

第34話：夢の国だから

ついに、この日がやって来た。そう、大樹と2人での旅行だ。

何かと理由をこじつけて、先延ばしにしてきたけど、そんなのいつまでも通用するわけなくて。旅行の話が出てから3カ月。半ば強引に今日という日を迎えたわけで。

行き先はまあ、定番の夢の国。デイズニールランド。1泊2日の予定だけど、あたしがびびって逃げる可能性3割。遊び疲れて寝る可能性3割。はしゃいで誤魔化す可能性3割。大樹にうまく丸め込まれる可能性……1割。

別に大樹が生理的に受け付けないとか、そういうことじゃあ、全然ないんだけど。むしろ、見れば見るほどタイプだし。

でも、その一線を越えるのは、もう少し後がいつてのが本音。まだあたしの中に心ちゃんがいる。時々、大樹と心ちゃんを重ねてる自分がいる。まだ、大樹を好きになりきれてない気がするの。気に食わないとこなんて何一つないのにな。なんで、心ちゃんに勝てないんだろ。もうすぐ別れてから3年。いい加減、新しい恋愛に夢中になりたいよ。

「ちか、着いたよ。」

デイズニールランドに向かう車の中、寝ているふりをしていたあたしを、大樹は優しい声で起した。あたしは眠たそうな声で

「うん。」

とだけ答えた。狸寝入りばれてないといいけど。

こんなときに狸寝入りするなんて、嫌な彼女だよ。でも、意識しすぎて耐えられなかったんだもん、しょうがないよ。途中で『帰る』とか言い出さなかっただけ、まだマシ。

「眠い？」

「ううん、大丈夫！」

あたしは大きく首を横に振った。

「さ、早く行こっ！」

大樹が心配そうな顔で見てるので、あたしは明るくそう言って車を
出た。もしかしたら『帰りたい』って顔に出てたのかも。こんなに
あたしを大事にしてくれる人を、あたしは傷付け過ぎてる。もっと
思いやりの気持ち、大切にしなきゃダメだね。

あたしは思い切って、自分から大樹の手を握り、入口へと走り出し
た。

第35話：溢れ出しちゃったの

どうしよう…どうしよう…どうしよー！！

あたしはバスローブ一枚でダブルベッドに腰掛け、ドアの向こう側から聞こえるシャワーの音を、ただずっと聞いていた。

…正に据膳。

大樹、シャワー浴びながら何を考えてるんだろう。あたしは…どうにかこの場を回避する方法ばかり、さっきからずっと考えてる気がする。今、寝たふりしちやおうかな。でも、大樹のことだから見破るだろうし…。具合悪いふりしようかな…却下。明日楽しめなくなっちゃう。ああ…どうしよう。

シャワーの音が止まり、一段と緊張が増したところで、あたしのおマヌケな携帯着信音が鳴った。無駄に慌てながらあたしは立ち上がり、テーブルに置いてある携帯を手取る。

「えっ…」

携帯を開くと、そこには懐かしい名前が点滅していた。心ちゃん。

ただでさえパニックってる状況なのに、なおさら思考回路ごちゃごちゃ。なんで？どうしてこのタイミングで電話なんかかけてくるの？もう、大樹だつて上がってきちゃうし…。

あたしは何度も携帯をテーブルに置いたり、手にとつたりを繰り返した。正直、早くコールが鳴りやめばいいと思った。そしたら何もなかったように忘れられる、きっと。でも、全然止まる気配はない。痺れをきらしたあたしは、勇気を振り絞って通話ボタンを押した。

「…はい。」

思わず声が震える。

「あ、ちかちゃん？」

「…え？」

電話の向こうから聞こえて来た声は妙にお気楽で、あたしは一瞬言

葉に詰まった。そんなことより、多分、この声…心ちゃんじゃない。
「あー、わかんないか。俺、俺！心の友達のゆーたつ。」

「ゆうた」っていう名前を聞いて、ようやく声の主と顔が一致した。
そつえば、あたしも仲良くしてたっけ。

「あつ…お久しぶりです。えつと…なんで？」

「あー、実はさ、」

ゆうたさんが何かを話し始めようとしたとき、

「もしもし？ごめん！」

急に聞き慣れた愛しい声に変わった。心ちゃんだ…。

「えつ？」

「今ゆうたと飲んでたんだけど、あいつ酔ってるから、俺がトイレ行ってる間に勝手に電話かけちゃったみたいで…。ほんと、ごめんな。」

「…うん、なんとなくそんな氣したし。いたずらされたんじゃ、しょうがないよ。大丈夫、氣にしないから…。」

あたしは少し意地を張ってそう言った。3年近くも引きずってるなんて、そんな重い女だって思われなくなかったから。

「そつか。じゃあ、またな。…あ、またっていうのは違うか…」

心ちゃんが困ったように笑ってる姿が目に見えた。また、なんて、もうあたしたちの間には必要ない言葉なんだね。

「…うん。飲み過ぎないようにね。」

「…ん。氣をつける。」

「じゃあ…切るね。」

「…うん。」

あたしは心ちゃんの返事を聞いてすぐ、電源を切った。昔は心ちゃんが電話切ったのを確認してから、切ってたんだけど…。早く切ってしまうないと、余計なことまで言っちゃいそうで怖かったから。逢いたい、まだ好きだよって…心ちゃんの声を聞いたら、溢れ出しそうになったの。だって、あたし…期待した。もしかしたら、心ちゃんが『やり直したい』って、そう言ってくれるかもって、期待し

たの。

馬鹿みたい。こんなタイミングで、自分の本当の気持ちに気付くなんて。

あたしきつと、この状況でも、心ちゃんに『やり直したい』って言われたら、大樹を置いてでも、今すぐに帰った。まだ、全然ダメだよ。

声聞いただけなのに、笑顔を思い出しただけなのに、こんなに、好き^ぎが込み上げて来る。今までずっと押し込めてきた気持ちが、溢れ出しちゃったの。今、あたしの頭ん中は心ちゃんदैいっぱいだよ。『またっていうのは違うか』って言葉が、ずっとチクチクして…苦しい。悲しい。

忘れてた…。好きな人と思うと、こんなに切なくて涙が溢れること。

「…ちか。」

「…。」

大樹…ごめんね。

第36話：ごめんね

「今の、元カレ？」

大樹があたしのそばにきて、静かにそう言った。怒ってるような、でも泣き出しそうな、そんな声に聞こえた。

「大樹、あたし、やつぱり…」

「別に諦めきれなくてたっていいって言ったじゃん。気にすんなよ。」

あたしの言葉を遮るように、少し冷たい声で大樹は言った。これからあたしが何を言おうとしてるのか、たぶん大樹にはわかってるんだろう。

「でも、付き合ってたって何も変わらないし、意味あるのかな…」

「あるよ。堂々とヤキモチだって妬けるし、俺の彼女だから触んなって言ったって変じゃない。そんなんで、今は十分なんだよ。」

胸が苦しくなった。大樹の言葉一つ一つに、あたしを大切に思う気持ちを感じられたから。そして、それに応えられない自分が、情けなくて酷い女に思えた。

少しだけ、大樹が自分自身と重なった。どんなに好きで、もがいても…叶うことのない想い。それでも、諦めきれずにいる。それぞれに一方通行で、交じり合うこともない。きっとあたしたちは平行線のままだ。

「大樹、もう…別れよ？」

「だから、焦んなって。…ヨリ戻そうとか言われたの？」

「そういうわけじゃないけど…あたし、大樹に散々期待させて、甘えまくって、それなのに裏切るかもしれないんだよ。」

いつだってほんとは心ちゃんが上回ってた。そばにいてくれる大樹を一番だと、どうしても言えなかった。

「裏切るって、元カレに戻るってこと？」

「…。」

「ありえないよ。別れたの何年前だと思ってるの？ヨリ戻すつもりだったら、とづくにあっちから連絡よこしてる。ちゃんと、現実見るよ。」

最後の言葉は震えてよく聞き取れなかった。大樹があたしを傷付けることを、平気で言えるはずがない。いつだってあたしを一番に想ってくれた。

その大樹がこんなセリフを言うなんて…そんなにまであたしは、大樹を追い詰めていたんだ。

「…ごめんね。大樹を好きになれなくて、ごめんね。」

「…ほんとに無理なの？可能性は1%もない？」

大樹は俯いて、とても不安そうに小さな声で尋ねた。あたしは『うん』とだけ答えた。涙が次々に溢れて何も言えなかったから。沢山ごめんねって、ありがとうって言いたい。

心ちゃんに出会わなかったら、きっと大樹があたしの1番だった。

でも、これがあたしの…あたしたちの運命だ。

第37話：変わりたい

大樹を好きになろうと思った。なれると思った。一緒にいて楽しくて、安らげて…あたしの求めているものを大樹は沢山持ってたから。何年後かには今日の判断を後悔するかもしれない。逃した魚はでかかったって思うかもしれない。でも、今のあたしには大樹の気持ちに心えられない。同じ量の愛情を返してあげられない。

結局、ホテルで一泊して、次の日は遊ばずに帰ってきた。車の中はもちろんすごく空気が重たくて、とても息苦しかった。大樹とのお気楽な関係は、もう戻ってこないんだと痛感した。車を降りようとしたあたしに、大樹は『もう一度だけ』と同じ質問を投げ掛けた。

『俺に可能性はない？』

答えは同じ。あたしは頷いた。大樹はあたしに笑顔を向けることなく『わかった』と言った。

ドアを閉めるとすぐに車は発進して、あたしはその走り去る車を目に焼き付けた。きつとあの車に乗るのはこれが最後だから。

大樹ともっとちゃんと話さなきゃいけないと思った。でも、言葉にすると涙が溢れてうまく喋れないし、あたしが泣くのはなんか違うと思った。このままでいいとは思わないけれど、今はこれ以上にも出来ない。

環境が変われば…時間が経てば、あたしも変わると思ってた。でも、実際は全然変わってない。心ちゃんに対する想いも、自分の精神的な面も。いつまでもあの家に縛られて、馬鹿みたいに煙草の煙を充滿させて…。こんなんじゃないダメだ。全然ダメ。いつまでたっても心ちゃんが消えるわけない。大樹にすがりついて、思い出に縛られて、ずっと前に進んでないんだ。

甘ったれなあたしはもう終わりにしたい。

変わりたい、強く。

第38話：ここにはいられない

「辞める?!」

「はい。」

突然の申し出に驚いた店長に、あたしは苦笑いをしながら頭を下げた。

ここにはもう、いられない。本当はずっとみんなと一緒にいたいけど、これ以上大樹に迷惑かけなくなかったし、正直どう接したらいいのかわからなかったから。

「実家に戻る予定なんです。出来れば夜は家にいてあげたいし…」
あながち嘘ではなかった。本当にもうあの家にはサヨナラしないと
いけない。とりあえず実家に帰って、新しい環境で自分を変えてい
きたい。

「わかった。じゃあ、今週末で終わりにしよう。んー、みんなで送
別会やらなきゃなー。」

「いえっ、そんな、悪いです…」

「そんなくらいいいだろー。最後はパーツとね!」

店長は笑ってあたしの肩に両手を乗せた。もちろん善意で送別会を
企画してくれるんだ。…断れるわけがない。

「あ、ありがとうございます。」

「じゃあ、今日も張り切って仕事してね!」

「はい!」

あたしは元氣よく返事をし、笑顔を見せた。大樹と気まずいからっ
て、やる気がない態度をとっちゃダメだもんね。この店にはほんと
に感謝してる。だから、最後は迷惑かけずに終わらせたい。ありが
とುತ್ತて気持ちをちゃんと残して去りたいんだ。

でも、あと一週間。大樹とどうやって接したらいいんだろう。どん
な態度が大樹にとってベストなんだろう。もうこれ以上大樹を傷つけ
たくない。あたしが辞めるって知ったら、どう思っかな…。みんな

にもちゃんと話さなきゃ。色々考えて、こうするのがベストだと思
ったって。納得してくれるかわからないけど、この考えはもう変わ
らない。みんなにはひたすら謝るしかないかな…。

来月はもう11月。心ちゃんとサヨナラした季節。あれからもう3
年経ったんだ…。こんなに関きすることってあるんだなあ。

それくらい愛せる人に出会ったってこと。これだけでも、あたしの
人生最高だったって思うの。だから、もう一度誰かを死ぬほど愛し
たい。誰かと比べたりしないで、ただ一人だけを見つめていたい。

まずは心ちゃんを忘れよう。思い出の品も全部封印。家も出る。1
1月5日、記念日にあの場所に行こう。それをあたしの気持ちの最
後にする。新しいあたしになる。

第39話：送別会

「ちかちゃん絶対遊びに来てよ!？」

香は涙を浮かべながらあたしに抱き付いた。しんみりした別れが嫌だからって、せっかく送別会を企画してもらったのに…あたしも悲しくて泣けてきちゃった。

「メールとかめっちゃするからね!？」

「うん。あたしもする。」

「…。」

千秋ちゃんは、あたしの勝手な決断に少しすねているようで、何も言わず香の後ろでこっそり泣いていた。

別にもう一生会えないってわけでもないのに、なんでこんなに悲しいんだろ。

「まあ、まあ。女性陣、そんなに泣くと綺麗な顔が台無しになるよ!。」

小鷹君がそう言ってあたし達を慰め、匠は酔った勢いで香と一緒になつくつついてきた。

「ちよつと！匠、ウザい。」

香が匠を押し退けてそう言っと、ようやくみんなに笑顔が戻った。

そんな中、大樹は何も言わずあたし達を見ているだけ…。前までの関係だったら、真っ先に大樹があたしの泣き顔を笑ったのに。

この1週間、大樹とは仕事以外の話はしてない。

多少気まずい空気はあったけど、仕事中はいつも通り優しくあたしに接してくれた。でも、仕事が終わると『お疲れ様』だけまるで決まり事のように言い合い、あたしはそのまま一人で帰るようになっていた。そんなあたし達の異変にみんなが気付かないわけではないけれど、あえて誰もそのことには触れなかった。最後までみんなに気を使わせてしまって、申し訳なかったな…。

「…あげる。」

香の後ろで泣いていた千秋ちゃんは、まだ少し怒った様子でヒヨコのストラップをあたしに渡した。

「…可愛いー！ありがとう。」

「それ、ちかちゃんに似てるから買ったの。香とあたしとお揃いだよ。」

千秋ちゃんがそう言うと、香が

「えへへー。」

と言いながら、携帯につけてあるヒヨコのストラップを揺らして見せた。

「えっ…超嬉しいんだけど！」

「なくさないでよ！」

あたしはストラップを両手で握り締め、うんうんと首を振った。

「あれ？俺らののは？」

「…ない。」

「ひっでー！」

匠が泣きまねをして小鷹君に抱き付き、そんな匠を小鷹君が突き放し…まるでコントのような光景を見て、またあたしたちは笑った。

「じゃあ、そろそろ…」

少し遠慮しがちに小鷹君がそう言うと、あたしたちは諦めたように頷き、少し涙を滲ませた。…しょうがないよね。別れはいつかくるもんだから。

「…じゃ、ちかは俺が送ってくから。」

「えっ？」

さっきまで蚊帳の外にいた大樹が突然そう言って、あたしの腕を取った。

「ちょっ、大樹…」

「じゃあ、お疲れ様〜！」

大樹はあたしの言葉を遮ってそう言い、みんなに手を振った。

「お疲れー！ちかちゃんまたねー！」

みんなもこうなるのが当たり前って感じで、違和感なく手を振り返

している。

「あつ、えつ、いや…」

「行くぞ。」

「…はい。」

有無を言わせない大樹の高圧的な声に、あたしは素直に従うことにした。

「またねー!」

みんなに手を振り、先に歩き出していた大樹の近くまで、小走りで駆け寄る。

これがいい機会だ。大樹とちゃんと話そう。
もう逃げないで。

第40話：帰り道で

「いったい何から話せばいいのか、何を伝えるべきなのか、あたしにはよくわからなかった。でも、大樹にはあたしの気持ちを全部伝えなきゃいけない、そんな気がした。」

「…辞めたのって俺のせい？」

少し申し訳なさそうな声で大樹はあたしに聞いた。あたしはなんて答えればいいのかわからず、ただ下を向いて歩いていた。

大樹のそばにいられないって思ったのは、バイトを辞めるきっかけだったけど…それはあたしの心の弱さが原因。むしろ自分のせいだ。

「…あたし、このまま大樹のそばにはいられない。」

「でも俺は、やっぱりちかが好き。代わりでもいいからそばにいたいと思う。」

今大樹がどんな顔でそのセリフを言ったのか、それを確認する勇氣はあたしにはなかった。覚悟を決めた、って目で見られたら、それを断ることはあたしに出来ないと思ったから。

「大樹は…利用するにはいい人すぎる。」

「いい人なんかじゃねえって。弱みに付け込んでんだから。」

「そんなことないよ。大樹はあたしにとって大切な人。大切な人を傷付けるような人間になりたくないって思う。」

しんみりした空気の中、あたしたちは何も言わず、帰り道の途中にある公園に立ち寄った。あたしの家に着くまでの10分で、話のケリがつくとは思わなかったから。

「大樹のこと、好きになれると思った。」

あたしは公園のベンチにゆっくり腰掛けた。大樹はあたしの斜め前に立ったまま…。あたしは泣きそうな顔を見られなくて、少し下を向いて話した。

「ほんとに大樹は完璧なんだよ。あたしの理想そのものっていうか

…。」

「でも、元彼には勝てないんだ？」

「…うん。デイズニールランドに行った日、あたし大樹のものになるって、覚悟してたつもりだったんだけど…」

あの時心ちゃんから電話が来なかったら、あたしたちは普通の恋人のように幸せに過ごしていただろうか。…いや、きっといつか自分の気持ちが誤魔化せなくなる日が来てたはず。ほんとの気持ちに氣付いてたはずだ。

「…うん。ちかの覚悟はちゃんと伝わってたよ。」

大樹は優しくそう言っと、あたしの隣りに腰掛けた。

「電話がきて、あたし期待したの。…より戻そうって言ってくれんじゃないかって。」

「うん。」

「…そう言われてたら、あたしは大樹を裏切って、すぐにでも元彼のところに帰った。何年も一緒にいて、あたしを大切にしてくれた大樹を裏切って、自分だけ幸せになろうとしたんだよ…。そんな自分がいるってわかったとき、自分のことほんとに最低だっと思った。最低で…そんなずる賢い自分には大樹の気持ちは真直ぐ過ぎた。」

綺麗で眩しくて、あたしはそれと同じものを返せなかった。

「元彼とは3年付き合ってたんだけど、あたしにとってはものすごくおっきな時間で…。何度も忘れようとしたのに、どこに行っても何をしてる思い出しちゃう…全然消えない。」

「…。」

大樹はあたしの話を静かに聞いていた。所々に小さく相槌を打ちながら。大樹の顔を見る勇気がなくて、あたしはただずっと地面を蹴る自分の足を眺めてた。声のトーンとか空気で感じるのは、大樹が怒ってるわけじゃないってこと。あたしの気持ちを全部すくい取ってくれてるような、そんな気がした。

「元彼にはつきりフられたって気もしないんだ。…だからたぶん、いつか戻って来るんじゃないかって思っちゃうんだよね。大樹の言

った通り、3年もほつとかれてるんだからありえない話なんだけさ。」

あたしが少し無理して笑うと、それに気付いた大樹があたしの頭を撫でた。どうしてこの人はこんなに優しいんだろう。自分で言うのもおかしいけど、あたしにこんな話されたら大樹だって辛いはずだよね…。なんで大樹を好きになれないんだろうな…。ほんと恋愛って理屈じゃない。

「で、元彼が戻って来るまでずっと待ってるつもり？」

「…うん。来月の5日ね、記念日なんだ。いつも…記念日に行ってた思いでの場所があるのね。そこに行って、自分の気持ちにケリつけるつもり。思い出の品たちも、全部捨てる。…とりあえず、そこから。あとはまだ何も決めてない。」

ようやく大樹の方を向いて、あたしは笑ってみせた。話したいことは全部話せたと思う。なんか…スッキリした。

「大樹、ごめ…」

ごめんね、と謝ろうとした時、突然大樹はあたしをきつく抱き締めた。

「気持ちにケリつけたら、俺んとこくればいいじゃん。」

「や、でも、それは…あの…」

「他の誰かを好きになるより、俺を好きになる方が簡単だと思わない？」

「それは…そう、なんだけど…」

大樹はあたしを抱き締める力をゆるめ、深く息を吐いた。

「…それが一番だと思う。待たせて。」

「でも…あたし、その日までに元彼に何か言われたら、平気で大樹を裏切るよ?!」

「それでもいいよ。ちかが元彼に戻ったら、そんなときは潔く諦める。つか、たぶんそんなくらのダメージないと諦めらんない。…ちかもそういうことでしょ？」

体を離し、大樹はあたしの顔を覗き込んだ。あたしは返答に迷い、

口をパクパクさせ、目をそらした。

大樹の気持ちが正直嬉しくて、その反面苦しかった。その想いに応えられなかった時、大樹をどれだけ傷つけるんだろう。あたしと同じくらい泣いて、同じくらい引きずるんだろうか。

「嫌って言うのは無しね。どっちにしる諦めがつかない気持ちは、ちかが一番わかるでしょ。」

「…傷ついてもいいの？」

「ちかは傷つくのが嫌だから諦めるって、そんな風に来なかったでしょ？」

確かに…。大樹の言葉はいつも確信をついてるんだ。あたしがうまく言いくるめられる相手じゃない。

「ん…ありがと。」

第41話：時間よ止まれ

11月5日、ついにこの日が来た。仕事もなく暇を持て余していたあたしは、この2週間、部屋の大掃除をしたり、買い物に出かけたりと、普段出来なかったことを沢山した。半分、現実逃避だったのかもしれない。でも、今日はちゃんとケリをつけなきゃ。

あれから大樹とはメールのやりとりだけしていた。前と変わらずくだらない話ばかり。それが大樹の最上級の優しさだと感じた。そんな大樹は

『今日はどうしても一緒に行きたい』

と、いくら断つてもきかなかった。近くまで送り、車の中で待つてから。と。なんだか、さらに追い込まれた感じ。きつとそこまでしないと、あたしがちゃんと答えを出さないと思ったんだろ。：あながちハズレでもないような気はするけど。

「…じゃあ、行って来るね。」

「うん。」

「ほんとに何時間も待たせると思うよ？朝になるかもよ？」

あたしは車のドアを半分開けたまま、大樹にそう言った。

「はいはい、わかったから。早く行ってきな。」

大樹が少し笑ってあたしにでこピンを食らわせた。あたしは観念して車から出て、中で待つ大樹に手を振った。

駐車場から少し歩いたところに、綺麗に夜景が見えるベンチがある。あたしはそこに座り、ゆっくりと息を吸った。この夜景は何度見ても綺麗だなあ、と思う。そして何度見ても心ちゃんを思い出す。ここでのいろんな話したなあ。今でも全部覚えてる。

出会ったときは、こんなに心ちゃんを好きになるなんて考えもしなかった。何年も一緒にいて、どんどんどんどん気持ち膨らんで…それは心ちゃんも同じだと思ってたのにな。ほんとに心ちゃんが全てだったんだって、離れてみて実感した。どこに行っても苦しくつ

て、一人になれば涙が出て…逢いたくて逢いたくてしやうがなかった。

心ちゃんと沢山喧嘩したはずなのに、別れて思い出すのは楽しかった事とか嬉しかった事ばっか。だからなおさら、気持ちが悪くてくあの頃より今のほうが、もっと愛しいと思うのは、やっぱり変なことなのかな…。どう頑張っても心ちゃんは消えないよ。

痛い。苦しい。悲しい。どうしてこんな感情を、人は恋だつて言うのかな。恋愛は楽しいだけじゃないって…じゃあ、苦しいだけのこの想いも、恋愛と呼ぶんですか？誰か教えてよ。

あたしは声もあげずに静かに泣いた。涙で滲む夜景も案外綺麗に見えた。

ねえ、心ちゃん。あたしは今でも心ちゃんが好きだよ。でも、もう3年が経つちゃったね。そろそろ潮時かなって思ってる。気付くのが遅すぎるくらいだよね。

あと5分で今日が終わっちゃう。このままもう止まってしまえばいいのに…。

第42話：3のジंकス

ベンチに座って、どれくらい泣いていたんだろうか。どれだけのことを思い出したんだろうか。心ちゃんの好きどころ考えてたら、止まらなくなつて…何百個も何万個もあるんじゃないかって思った。きっとその全ての条件が当てはまる人が、この世の中には何人かいるんだと思う。でも、心ちゃんじゃなきゃダメ。結局こう。

なんかわからないけど、愛してる。理由なんかないけど愛してる。結局それが一番強い。

どうしたもんかと、溜め息をついた時、ゆっくり近付いてくる足音が聞えた。たぶん、痺れを切らした大樹が迎えに来たんだろう。…なんて説明したらいいかな。

「…ちこ？」

えっ、今、ちこって呼んだ？…大樹じゃない。

あたしが顔を上げると、心配そうにあたしを見つめる心ちゃんが、そこにいた。なんでいつも絶妙のタイミングで…。

「…人違いかと思った。」

そう言っていると心ちゃんは、昔と変わらない笑顔を見せた。声のトーンも話すりズムも全部変わらない。あの頃のままの心ちゃんだ。

「なに…してるの？」

聞いてから、ハッとあたりを見回した。もしかしたら一人で来たんじゃないのかもしれないって思ったから。でも、どうやらあたしたちの他に人の気配はなかった。

「なにつて…なんもないけど。」

「なにそれ。」

思わずあたしが笑うと、心ちゃんは自然と隣りに腰掛けた。…この感じ、懐かしいな。

「…元気にしてた？」

「うん。普通に元気だった。」

もちろん、嘘をついた。寂しかったとか逢いたかったとか、言ってしまったら今日までの3年が無駄になっちゃう気がしたから。

「…そつか。」

「…心ちゃんは？」

「俺は…」

心ちゃんはじつとあたしを見つめたかと思うと、何も言わずに下を向いた。あたしを捨てた分際で、自分も『元気だ』と言うのは違うと思ったのだろうか。心ちゃんは優しいからね。

何を言えいいのかわからず、お互い黙ったままの時間が流れた。隣りにいる心ちゃんの手を握りたい、その腕にくるまれない…そんな欲が次から次に出てきて、その感情を押さえ付けるのでいっぱいになる。逢って声を聞くとなおさらわかるんだ。あたしはまだ心ちゃんを愛してるってこと。

…こんな日に逢いたくなかった。出来ればもう二度と逢いたくなかった。

「…あたし、そろそろ帰らないと。」

これ以上一緒にはいれない、そう思った。我慢の限界。心ちゃんが今日という日にこの場所に来たこと。それだけで、あたしはこっそり期待してた。あたしに逢いに来たんじゃないかって。

…だったら、なんなの？心ちゃんがあたしに逢いに来たんだとしたら、あたしはなんて言うの？

今の自分には何も答えを出せなくて…時々、頭の片隅に車の中で待つ大樹のことが浮かんた。そして、頭の中の大輝が『何のために来たんだ』ってあたしを叱るの。

「…送ってくよ。」

帰ると言ったのになかなか動こうとしないあたしより先に、心ちゃんがそう言っただち上がった。

「大丈夫。…待ってる人がいるから。」

ちゃんとと言わないと、流れのまま心ちゃんと一緒に帰ってしまいそうなの自分がいた。また、肝心なところで大輝を裏切ってしまう。早

くこの場を去らないと…。

「…彼氏？」

「…。」

あたしはあえて何も言わなかった。彼氏だと嘘をつきたくもなかったし、彼氏じゃないよって言うのも『あなたを引きずってます』って感じがして言えなかった。あたしはようやく立ち上がり、車の鍵をポケットから出した心ちゃんに

「ありがと。」

とだけ言って背を向けた。

バイバイは言いたくなかった。これでほんとに最後。もう二度と逢わないだろうけど…バイバイは今のあたしには悲しい言葉過ぎる。

まだ、言えない。歩き出したあたしは、絶対に後ろを向かないと心に決めた。あたしを見送る心ちゃんの姿を見たら、たぶん泣き崩れてしまう。必死に涙を堪えて歩いた。何もなかった顔で大輝の元へ帰ろう。それがきつと一番幸せなんだ。

「…ちこー！」

手首を掴まれ、びつくりして、あたしは足を止めた。…どうして追いかけて来たりなんかするの？

「このままじゃ、今日ここに来た意味がない。」

「…え？」

あたしが振り返って首をかしげると、心ちゃんはゆっくりあたしから手を放した。

「この前、ちこに逢いに行った。あの飲み屋でバイトしてるって知って。…もう、辞めたあとだったけど。で、今日ここに來るって聞いたんだ、男の人に。『ここに逢いにくるくらいなら、11月5日にちかに逢ってくれ』って。言いたい事はそこで言っただけだって言われた。」

「そんなの、聞いてない…」

それを言ったのは間違なく大輝だ。あたしが今日ここに來るのを知ってるのは、大輝しかいないもん…。

どういうつもり？大輝の意図がわからない。

困惑してるあたしをよそに、心ちゃんは落ち着いた様子で話し始めた。

「あいつも、今日に賭けたんだと思う。俺も今日に賭けた。」

「ちよつと待って、話が見えない…」

「忘れられなかった。ちこのこと、毎日考えてた。俺から別れるって言ったくせに、実際ちこがないとなにも手につかなかった。家に帰るとちこがいる気がして…ちこが、どれだけ俺の中でかかったのか離れて気付いた。」

あたしは口を開けたまま、心ちゃんの話聞いていた。いや。聞き流す、という表現のほうが近いかもしれない。今、自分の目の前で起こっていることが、全部幻のように思えた。心ちゃんの言ってる意味がわからない。なにが起きてるのかわからない。

「…なに、言ってるの？だって、すずは？」

「…今思えば、同情だったんだと思う。可愛がってたのは事実だし、弱ってる姿を見て助けたいと思った。でも、フラれた。」

「え？」

「ちこと別れたら、毎日必要な何かが足りない感じで、人を助けてやれる余裕なんてなくなった。超ダメ男だったから…言われて当然だったと思う。このままじゃダメだと思って、ちこに何度も何度も逢いに行こうとした。でも、あんなに沢山泣かせたくせに、今さらどんな面下げて逢ったらいいのかわかんなくて、結局…。」

「なに、調子いいこと言ってるの…？あたしがほんとに必要ななら、別れる前に気付いて欲しかった！あんなに一緒にいたのに、他の子に負けて…。今さら忘れられないとか言われても信じられるわけないじゃん！」

「それはわかってるよ…。」

心ちゃんは少し俯いて、泣きそうな声でそう言った。

「そう言われると思ったから逢いに来れなかった。そんなんでぐずぐずしてる間に何年も経って、今さら逢いに行っても、ちこは幸せ

にやってるんじゃないかって…」

「…幸せなんかじゃなかった！心ちゃんのせいでずっと苦しかった。あたしがどれだけ心ちゃんを好きだったか、知ってるでしょ…。簡単に消えるわけじゃないじゃん…」

涙が零れた。勝手に『幸せにやってる』だなんて思われてたことが悔しかった。あたしはずっと心ちゃんに苦しめられていたのに。

「この前、ちこの声聞いたら、止まらなくなっただ。頑張っただれようとしたけど、やっぱり無理だった。勝手だって言われてもいい。俺はちこが好き。ちこじゃなきゃ、ダメなんだよ…。」

心ちゃんの声が、言葉が、あたしの胸を締め付けた。こんなにも嬉しいのに、こんなにも苦しい。

この3年、大輝のそばにいて、ずっと忘れようとしてきたのに、心ちゃんのたった一言で気持ちが揺らぐ。ずるい。何で今さらそんなこと言うの…。今、心ちゃんの胸に飛び込んだら、あたしの3年は何のためにあったの？全部無駄になるんじゃないの？別れて大切だって気付いたって…そんなの、あたしのプライドが許さないよ。

「…あたし、ずっと心ちゃんを忘れようとしてきたんだよ？なのに、今さら好きって言われても素直に受け止められない。そんなの許せない。信じられない。」

大輝は何を望んだの？あたしがこれ乗り越えて、大輝のところに帰らないとダメってこと？そこまでしないと、あたしの『心ちゃんを諦める』って言葉が信じられないってこと？

「信じられないなら、信じてもらうまで何年でも言い続ける。俺はもう後悔したくない。どうしてもちこが好き。受け止められないなら、ちゃんとフって。」

そんなの、卑怯だ。あたしが心ちゃんをフれるわけない。サヨナラなんて言えるわけない。今でもこんなに好きなのに。

…でも、支えてくれた大輝を、無償の愛をくれた大輝を裏切りたくない。もう傷つけたくないよ…。

「…わかった。心ちゃん、ばい…」

ああ、ダメだ。

「だめ、言えない…。」

そう言つて、あたしは首を横に振つた。バイバイって口にしたら、涙がびっくりするくらい出てきたから。…体は正直だ。大輝にサヨナラするときも悲しくって涙が出た。でも、ほとんどが大輝を傷つけたことに対する『ゴメン』って気持ちの涙。でも、今は違う。また心ちゃんを失うことへの恐怖の涙。

心ちゃんも大輝もどっちも大切。でも、失つて苦しくなるのは…心ちゃんだ。恋愛は綺麗事じゃ片付けられない。大輝を失つてもいい傷つけてもいい。それでもやっぱり目の前のこの人だけは、失いたくないの。ひどい女でごめんね、大輝。

「俺ともう一度付き合つて？」

心ちゃんはそつとあたしの涙を拭いて、そう言つた。こんなことされたら…NOなんて言えるわけない。

「…ずるいよ。」

そう言つて泣き止まないあたしを心ちゃんは力強く抱き締めた。懐かしい心ちゃんの匂いがあたしを包む。なんだか幸せで余計涙が零れた。

大輝を裏切つた自分はすごく嫌い。悪い女だと思う。心ちゃんをフツて、あたしを大切にしてくれた大輝を選んだら、それはそれは素敵な恋だったと思う。みんなその恋を選ぶのかもしれない。でも、あたしには出来なかった。あたしにはこれが真実だった。

あたしたちは2人で大輝の元に行くことにした。ちゃんと、話さなきゃと思つたから。でも、駐車場に着くと、そこにはもう大輝の車はなかった。

「…わかつてたのかな。」

心ちゃんが言つた。もしかしたら、そうなのかもしれない、と思つた。あたしがこの状況でも心ちゃんを選ぶつて、大輝にはわかつてたのかも…。あたしはこの前の大輝の言葉をふと思い出していた。

『それくらいダメージがないと諦められない』

…きつと大輝は今日が最後の日だって、最初から決めてたんだ。勝負を賭けてなんかいなかった。

「…ありがとう。」

もう、声の届くはずのない大輝にあたしは呟いた。大輝に出会ったこと、一緒にいたこと、それもあたしの人生で大切な時間。必要な時間だったと思うの。

それからあたしたちは大掃除したての、あの部屋に帰り、また一緒に暮らすことにした。周りはあたしを馬鹿だつて言うと思うけど、今はとりあえず幸せ。

あんまり自慢できるような話じゃないかもしれないけど、これで良かったと思うの。3年離れても消えない愛があった。それはすごいことだと思うから。

これからはずっと心ちゃんと一緒にいれますように。

付き合つて3年で別れ、それから3年の時が流れ、今のあたしたちがいる。幸せな笑顔がある。

これがあたしの『3のジンクス』。

第42話：3のジंकス（後書き）

読んでいただきましてありがとうございます！！この話を書き始めてから、あたし自身も波瀾万丈の毎日でした：（・・・）彼氏が浮気をして、まんまとフられてしまったあたしですが　笑

結局『お前じゃないと…』ってコトで、揉めに揉めてヨリを戻したんですが、その半年後、浮気相手と関係が終わってなかったというコトが判明：揉めますよね。笑　かなり束縛が激しくなるよ、って条件で今はうまくやっております！！　まあ、おかげでこの話が長期間ストップしてしまったり、いきなり更新したりと、かなり不安定でしたが、なんとか書き終えることが出来ました　皆さんの声援のおかげですね（・・・）　この話のように、自分も振り回されっぱなしですが、結局惚れた方が負けだと最近はドンと構えてますね　笑　次回作は出来れば温かい話を書きたいです！！今後も頑張りますので、応援お願い致します（・・・）ゞ感想などいただけたら嬉しいです！！よろしくお願いしまーす

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5558c/>

3のジंकス

2010年10月24日01時48分発行